福岡市埋蔵文化財調査報告書第1045集

HAKA TA

博多133

—博多遺跡群第180次調査報告—

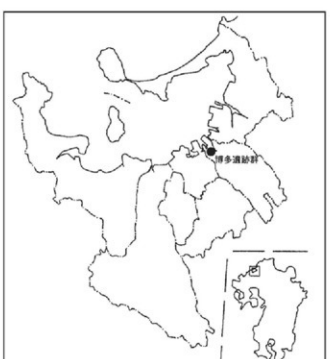
2009

福岡市教育委員会

HAKA TA

博 多 133

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1045集



調査番号 0754
調査略号 HKT-180

2009

福岡市教育委員会

序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は増加の一途をたどっており、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、博多区祇園町において発掘調査を実施した博多遺跡群第180次調査の記録を収録したものです。

調査の結果、古墳時代から中世にわたる数多くの生活遺構が確認され、長きにわたって本地域が発展し続けたことを示す良好な資料を得ることができました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました双日株式会社には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が文化財に対する認識と理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は双日株式会社が実施した博多区祇園町343・346・348・351・354地内において民間開発にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課が平成19年度に実施した博多遺跡群第180次調査の調査報告書である。

2. 本書で用いる方位は旧国土座標第2系による座標北で、磁北はこれに6°10′西偏する。

3. 調査区は予定建物を基軸として任意の3m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。

4. 遺構の呼称は略号化し、井戸→SE・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。

5. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦による。

6. 本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬治・井上加代子・米倉法子による。

7. 製図は副田則子・撫養久美子による。

8. 本書に用いた写真は加藤による.

9. 本書の執筆・編集は加藤が行った。

10. 本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本 文 目 次

Ⅰ．　はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1

Ⅱ．　調査区の立地と環境 …… 2

Ⅲ．　調査の記録 …… 7
　1．調査の概要 …… 7
　2．第1面の調査 …… 8
　3．第2面の調査 …… 15
　4．第3面の調査 …… 32
　5．第4面の調査 …… 48
　6．その他の資料 …… 51

Ⅳ．　小結 …… 56

挿 図 目 次

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1/30,000) …… 3
Fig. 2　調査区位置図(1/7,500) …… 4
Fig. 3　調査区周辺測量図(1/500) …… 5
Fig. 4　中央ベルト土層断面図(1/60) …… 6
Fig. 5　第1面遺構全体図（1/100）…… 6
Fig. 6　硬化面SX02土層断面図（1/40） …… 8
Fig. 7　硬化面SX02出土遺物実測図（1/3） …… 8
Fig. 8　SE01・18（1/100）・B2SP3実測図（1/40） …… 10
Fig. 9　SE01出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 11
Fig.10　SE18出土遺物実測図（1/3） …… 13
Fig.11　第1面出土遺物実測図（1/4） …… 14
Fig.12　第2面遺構全体図（1/100）…… 15
Fig.13　SK28・29実測図（1/40） …… 16
Fig.14　SK28出土遺物実測図（1/4） …… 17
Fig.15　SK29出土遺物実測図（1/4） …… 18
Fig.16　SE13・16・27（1/60）・C5SP3実測図（1/40） …… 20
Fig.17　SE13・16出土遺物実測図（1/3） …… 21
Fig.18　SE27出土遺物実測図（1/3） …… 24
Fig.19　SD12・15実測図（1/60・1/40） …… 26
Fig.20　SD12出土遺物実測図（1/4） …… 27
Fig.21　SD15出土遺物実測図（1/4） …… 29
Fig.22　第2面出土遺物実測図（1/4） …… 32
Fig.23　第3面遺構全体図（1/100）…… 33
Fig.24　SK33（1/60）34・42・43（1/40）SE35・38実測図（1/60） …… 34
Fig.25　SK34出土遺物実測図（1/4） …… 36
Fig.26　SK42・43出土遺物実測図（1/4） …… 37

Fig.27 SE33・35・38出土遺物実測図（1/4・1/6）……40
Fig.28 SD32実測図（1/60）……42
Fig.29 SD32出土遺物実測図.1（1/4）……43
Fig.30 SD32出土遺物実測図.2（1/6）……44
Fig.31 第3面出土遺物実測図（1/4）……45
Fig.32 包含層2層出土遺物実測図（1/2・1/3）……45
Fig.33 第4面遺構全体図（1/100）……48
Fig.34 SK50・51（1/40）・SD46実測図（1/60）……49
Fig.35 SK50・51・SD46出土遺物実測図（1/4）……50
Fig.36 包含層3層出土遺物実測図（1/3・1/6）……51
Fig.37 混入遺物実測図（1/4）……52
Fig.38 第1面・2面出土石器実測図（1/2・1/4）……53
Fig.39 第3面・4面出土石器実測図（2/3・1/4）……54

写 真 目 次

Ph. 1 第1面全景（東から）…… 7
Ph. 2 硬化面SX02（東から）…… 8
Ph. 3 硬化面SX02（南東から）…… 9
Ph. 4 SX02近景（西から）…… 9
Ph. 5 SX02下面遺物（西から）…… 9
Ph. 6 SX02下面遺物.2(西から)…… 9
Ph. 7 SX02出土遺物 …… 9
Ph. 8 SE01上面（西から）……10
Ph. 9 SE01土層断面（東から）……10
Ph.10 SE01出土遺物……12
Ph.11 SE18出土遺物……13
Ph.12 SE18上面（南から）……14
Ph.13 第1面B2SP3（南から）……14
Ph.14 第1面出土遺物 ……14
Ph.15 第2面全景（東から）……15
Ph.16 SK28上面（南から）……16
Ph.17 SK28完掘状況（東から）……16
Ph.18 SK29上部土層断面（西から）……17
Ph.19 SK29上面（南から）……17
Ph.20 SK28・29出土遺物 ……18
Ph.21 SK29下部土層断面（南から）……19
Ph.22 SK29下面（南から）……19
Ph.23 SE13上面（西から）……20
Ph.24 SE13土層断面（北東から）……20
Ph.25 SE13出土遺物……22
Ph.26 SE16上面（西から）……22
Ph.27 SE16完掘状況（南から）……22
Ph.28 SE16完掘状況（東から）……23
Ph.29 SE16完掘状況（東から）……23
Ph.30 SE16出土遺物……23
Ph.31 SE27井筒土層断面（西から）……24
Ph.32 SE27堀方上端（西から）……24
Ph.33 SE27出土遺物……25
Ph.34 SD12（東から）……28
Ph.35 SD12遺物出土状況（西から）……28
Ph.36 SD15（南から）……28
Ph.37 SD15遺物出土状況（北から）……28
Ph.38 SD12・15出土遺物 ……30
Ph.39 C5・SP3土層断面（南から）……31
Ph.40 C5・SP3（南から）……31
Ph.41 包含層1層出土遺物……31
Ph.42 第3面全景（東から）……33
Ph.43 SK34遺物出土状況（北から）……35
Ph.44 SK34完掘状況（西から）……35
Ph.45 SK43土層断面（北から）……36
Ph.46 SK33上部土層断面（北から）……37
Ph.47 SK33・34・43出土遺物 ……38
Ph.48 SE35堀方上端（西から）……39
Ph.49 SE35土層断面（西から）……39
Ph.50 SE35出土遺物……41
Ph.51 SE38出土遺物……42
Ph.52 SD32（西から）……42
Ph.53 SD32遺物出土状況（西から）……42
Ph.54 SD32出土遺物……42
Ph.55 第3面出土遺物……45
Ph.56 包含層2層出土遺物……46
Ph.57 包含層2層出土遺物……47
Ph.58 第4面北半部全景（東から）……48
Ph.59 第4面北半部全景（西から）……49
Ph.60 第4面南半部全景（東から）……49
Ph.61 包含層3層土器出土状況（南から）……50
Ph.62 第4面出土遺物……55

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区祇園町343・346・348・351・354において、双日株式会社より商業ビル建設計画の策定に当たって埋蔵文化財の有無の照会が、平成19年8月30日に埋蔵文化財１課に提出された事により始まる。申請面積は401.17㎡、受付番号は19-2-422である。

埋蔵文化財1課で確認した所、平成17年度・18年度の2度にわたって照会がなされ、すでに確認調査が行われており、当該地南西部は従前のビル基礎工事・解体で壊滅状態であること・北東部は地表から150～250cmの間に古墳時代から中世にわたる遺構が良好な状態で遺存していることがわかっていた。同課では設計変更等で現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。そのため埋蔵文化財の遺存する北東部を調査対象として事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して同社と教育委員会との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成19年12月10日に着手、20年2月19日に全ての行程を終了した。

調査番号	0754	遺跡略号	HKT-180
調査地地籍	博多区祇園町343・346・348・351・354	分布地図番号	49（天神）0121
開発面積	401.17㎡	調査実施面積	134.83㎡
調査期間	071210～080219	事前審査番号	19-2-422

2．調査の組織

【調査委託】双日株式会社
【調査主体】福岡市教育委員会　教育長　山田裕嗣
【調査総括】文化財部長　矢野三津夫　　埋蔵文化財第1課長 山口譲治
　　調査係長 来倉秀紀
【調査庶務】文化財整備課　鈴木由喜(19年度)　古賀とも子（20年度）
【発掘調査】加藤良彦
【発掘作業】永田豊彦　原田浩　　藤村正勝　　山中征生　　浦伸英　　中村尚美　今村由利
　　北野宏行　近藤英彦　　崎山幸義　　濱口長治　　来良恵美　　元澤慶寛
　　結城敦雄　中野暢子
【整理作業】木村厚子　国武真理子　南里三佳

Ⅱ．調査区の立地と環境

博多遺跡群は、北を陸繋島である志賀島と海の中道、西を糸島半島・玄界島・能古島とによって囲まれた天然の良港である博多湾の南東部に位置する。

湾岸には、湾内を巡る左転廻流と瑞梅寺川・室見川・那珂川・多々良川等の諸河川の搬出する砂とによって著しい砂丘の発達がみられ、当遺跡群はこの那珂川右岸に形成された3列の、内陸側2列の「博多濱（柳田濱・袖の濱）」と湾岸1列の「息（神）の濱」と称される砂丘上に立地している。遺跡群は西を那珂川とその支流の博多川、東を中世末に開削されたと伝えられる石堂川、南を同じく石堂川開削以前に砂丘南辺を西流し那珂川に合流していた旧比恵川を改修したと伝えられる「房州堀」にと、中世末には四方を水によって囲まれ防御された地域である。

「博多濱」では黒川式・夜臼式土器が採集されており、このころから人跡が伺える。遺構は147次調査地点から弥生前期末の甕棺墓が検出されており、それ以前の形成であることが知られる。集落は検出されておらず、現在のところ集落の形成が確認できるのは弥生中期前半以降である。

「神の濱」は第5次調査地点で地表下4.5mの地点から砥石が出土しており、古代段階までは形成途上にあった新しい砂丘であり、12世紀初頭には低地が埋め立てられ博多濱と陸繋化し、確実な遺構は12世紀後半以降で同時に砂丘中央を貫く幹線道路が整備されている。

大陸と指呼の間にあるこの地は、江戸時代の鎖国に至るまで常に国内の対外交渉の表玄関としての役割を果たしてきた。弥生時代中期前半には竪穴住居群と甕棺墓群を成立させる集落となり、終末期から5世紀にかけては竪穴住居群と方形周溝墓群、28・31次調査区検出の5世紀前葉60m級の前方後円墳（博多1号墳）・109次調査区検出の5世紀後半24～25m級の前方後円墳（SX223－博多2号墳？）を出現させるまでになっており、殊に終末期～古墳時代前期は鍛冶工房の出現と近畿・東海・吉備・山陰・半島系と広範にわたる土器群が出土し、先進性と対外交渉の拠点としての面を早くも示している。筑紫国造磐井の反乱後の536年「那津官家」の設置以降、古代には大宰府の要津・唯一の外港として軍事・外港の基幹をなし、方100mの区画溝に大型建物・瓦・帯金具・石帯・陶硯・「長官」「佐」等の墨書土器と官衙を示す多くの資料が出土し「鴻臚中島館」や「津　厨」が考えられている。博多が国際貿易都市として大発展するのは「鴻臚館」の衰退後平安後期から鎌倉前期にかけ居留唐人街の「博多津唐房」の形成からで、中国を中心とした膨大な量と質の貿易陶磁器・墨書陶磁器等が出土する。以後、聖福寺・承天寺・妙楽寺の建立、13世紀末の鎮西探題の設置、室町幕府による九州探題の設置・勘合貿易の開始と、名実共に九州の中心となる。しかし平和裡の発展のみではなく、対外的には貞観11（869）年新羅海賊侵攻・寛文2（1019）年刀伊の入寇・文永11（1274）年弘安4（1284）年の元寇、対内的には天慶3（940）年藤原純友乱・元弘3（1333）年鎮西探題の滅亡・（1532）年大友大内の戦い・永禄2（1559）年大友筑紫惟門の戦い・永禄12（1569）年元亀2（1571）年の大友毛利の戦い・天正2（1574）年大友龍造寺の戦い・天正11（1583）年大友島津の戦いと、この地の支配権を巡って繁栄と戦乱を繰り返し、天正14（1586）年島津の焼き討ちによりことごとく焼き尽くされた。天正15（1587）年島津征伐に向かう太閤秀吉によって現町割りに復興され、秀吉の思惑とも相まって朝鮮出兵の兵站基地として往時の賑わいを取り戻すが、徳川幕府の鎖国政策により国際貿易都市としての役割を長崎に譲り、一城下町・商業都市として明治を迎える。

Fig.1 周辺遺跡分布図(1/30,000)

Fig.2　調査区位置図(1/7,500)

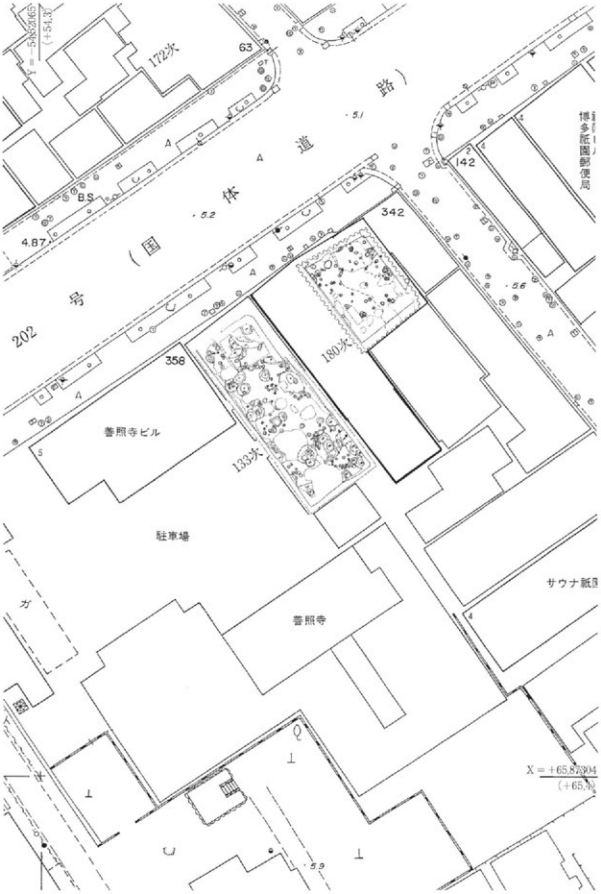


Fig.3 調査区周辺測量図(1/500)

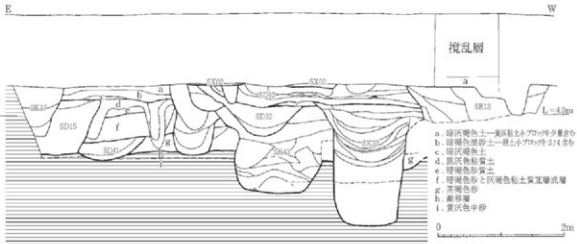


Fig.4 中央ベルト土層断面図(1/60)

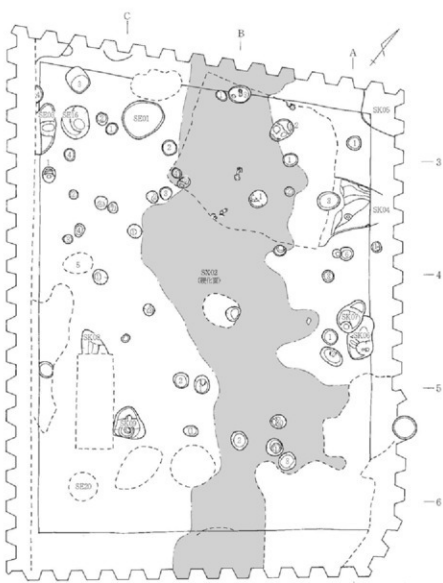


Fig.5 第1面遺構全体図 (1/100)

Ⅲ．調査区の記録

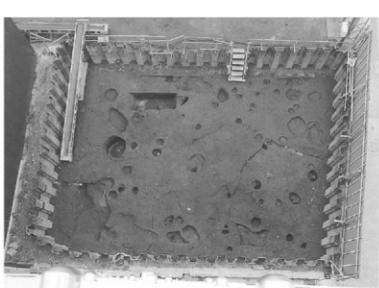
1．調査の概要

本調査区は博多遺跡群の「博多濱」の砂丘列Ⅰとされる内陸側の砂丘北西側緩斜面に位置し、現況は宅地で地表標高は5.6mを測る。1m程の撹乱層を除去後調査第1面とし、さらに1.2m下方の砂層上面まで4面にわたる調査を実施している。周辺では第133次調査区が西に、172次調査区が北に隣接し、他多数の調査区が密集する（Fig.1～3）。

基本層序は（Fig.4）矢板内を重機で鋤き取っているため調査第1面までは確認調査の実績を用いている。100cmの表土・以下、全面にわたる鍵層となる土層は地山上の標高約4mの暗褐色砂と灰褐色混砂粘質土の厚5～10㎜互層の風成層（f層）・3.7mの茶褐色砂（g層）のみで、f層上面を調査第3面としている。調査区中央ベルトの土層を参照すると、表土直下20cm程の暗褐色混砂土の中世後期包含層（a層）・10～15cmの黄灰色粘土ブロックを含む暗褐色混砂客土（b層）・10cm弱の暗灰褐色土（c層）・15cm程の黒灰色粘質土（d層）一上面が調査第2面・10cm程の暗褐色砂質土（e層）・上記f層・g層・10cm弱の漸移層（h層）・黄灰色中砂の基盤層（i層）で調査第4面となる。地形は北西側に緩く傾斜する。

調査は遺構の破壊される建物部分に限定し、測量基準線は建物の基準線に合わせ、任意で3mグリッドを設定した。排土は遺構が遺存しない南西部で処理できたため反転することなく、ほぼ全面を一気に調査することができた。1mの表土鋤き取りを業者が実施後12月6日に現地協議を行った。この際、すでに遺構の一部が露出していたため、改めての鋤き取りは中止し、12月10日より調査に着手する事とした。12月19日に第1面の全景を撮影、12月25日に測量・実測を完了し、掘り下げを開始。翌1月10日に第2面を完掘・全景を撮影。1月24日より掘り下げ開始。2月7日に第3面を完掘・全景を撮影。2月13日より掘り下げ開始。2月15日に北半部第4面を完掘・全景を撮影し2月18日に第4面を完掘・全景を撮影、実測を完了し翌19日に重機による埋め戻し、調査機材を撤収し調査を完了した。

検出したおもな遺構は第4面で古墳時代初頭の土壙3基、古墳時代後期溝1条、奈良時代土壙2基他、全面にわたって11世紀後半土壙6基・井戸1基・溝1条、12世紀前半土壙5基、12世紀中～後半土壙14基・井戸3基・溝1条・で最盛期となる。13世紀前半土壙3基・井戸1基・溝1条、13世紀後半井戸3基・溝1条、第1面で幅5m程の北西方向に延びる土器小片・貝殻片・粘土粒を多く含む14世紀初頭前後の硬化面を検出した。14世紀初頭以降は撹乱のため遺存しない。面積の大部分を井戸が占め、11・12世紀代が中心となる。

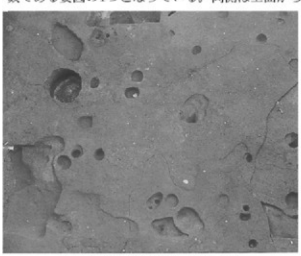


Ph.1　第1面全景（東から）

2．第1面の調査 (Fig.5 Ph.1)

第1面の調査は表土・撹乱土直下の標高約4.5m、暗褐色混砂土（a層）上面で実施した。西隣の第133次調査区第1面より60~80cm高い。検出した主な遺構は路面状の硬化面1面・井戸4基・土壙8基・他柱穴で少ない。時期は11世紀後半から14世紀初頭を中心とする。

1）**硬化面SX02**（Fig.5・6 Ph.2～6）　調査区中央を北西方向に幅2～3m厚さ2~5cm程、多量の土器小片・貝殻片・炭粒・焼土粒を含み（Ph.4）硬く締まる暗灰褐色土が薄く覆っており、第1面の遺構が少数である要因の1つとなっている。両側は上面からの削平によって蛇行するが、その頂部を結んで復元すると幅5m・N―45°―W程に方位を取る。建物土間とするには長大であり、道路面ではないかと考える。側溝は伴わない。



Ph.2　硬化面SX02（東から）

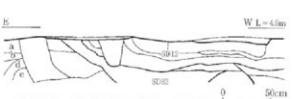


Fig.6　硬化面SX02土層断面図（1/40）

出土遺物（Fig.7 Ph.7）1は中国黄褐釉陶器灯盞。口縁・受皿部を欠損する。脚径13.2cm。現況で器高21cmを測る。受部以上にオリーブ灰白色不透明釉・以下に鈍い黄橙色透明釉釉を掛け分ける。2は陶器捏鉢。口径28.6cm。口縁内外に灰オリーブ不透明釉を掛ける。露胎褐色。3~5は土師器。3は坏。口径14器高2.8cm。糸切り。鈍い黄橙色。4は皿。口径6.8器高1.1cm。糸切り後板圧痕。鈍い橙色。5は皿状のサナで径20cm程。径12mmの焼成前の穿孔を多くする。6~8は管状土錘。それぞれ37×9mm 3g・39×16mm10g・74×19mm18gを測る。9はガラス小玉。6.8×5.1mm青色透明。10は当具状滑石製品。25×8mm。上面に炭化物付着。灯心押さえか。11は**壎**で厚2.9cm。他に龍泉窯系青磁Ⅱ類碗・口禿**境**小片出土。13世紀末～14世紀初頭。

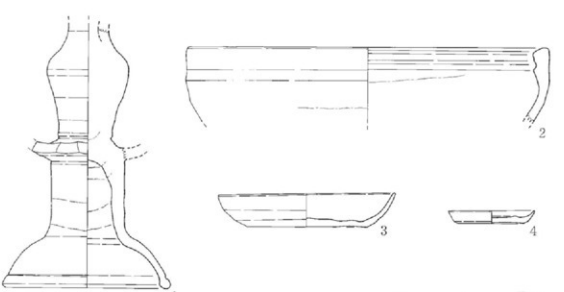


Fig.7　硬化面SX02出土遺物実測図（1/3）

Ph.3　硬化面SX02（南東から）

Ph.4　SX02近景（西から）

Ph.5　SX02下面遺物（西から）

Ph.6　SX02下面遺物.2（西から）

Ph.7　SX02出土遺物

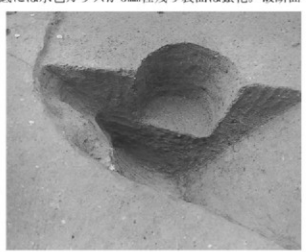
2）. **井戸**　調査区北東部でSE01・16の2基と16世紀のSE26と近世SE20を検出した。いずれも井筒部のみで、当初は土壙と誤認している。堀方は上方からの切り合いで下面でしか検出できない。

SE01（Fig.8 Ph.8・9）　C2グリッドに位置し、径3mの堀方に径40cm高さ40cm弱の木桶を井筒として据える。以上は2段になって径85cmまで広がる。井底レベルは2.5mで浅い。

出土遺物　（Fig.9 Ph.10）12は龍泉窯系三足香炉脚。内底に小穴。底面は露胎。13は口禿白磁小

碗で口径12.0cm。外面高台脇は露胎。14は口禿白磁坏。口径9.4器高2.9cm。外底は釉拭き取り。15は吉州窯玳瑁天目小片。16は墨書「綱」磁竜窯小口瓶の底部片。内底にオリーブ褐色の不透明釉。17~19は土師器。17は皿。口径9.6器高1.5cm。糸切り後板圧痕。淺黄橙色。18・19は坏。18は口径15.4器高2.8cm。外底糸切り。淺黄橙色。19は口径15.0器高2.6cm。糸切り後板圧痕。黄橙色。20は瓦質灯盞。皿状受部で径15.0cm。灰色で器形はSX02出土1に似る。21は花弁文軒丸瓦。上半小片で径17cm程。黒灰色。22は瓦質甕で、口径30cm。内外回転ナデ外面頸部下には平行タタキ・内面にはケズリ。外面灰内面暗灰色。23~26は管状土錘。23は58×17mm17g・24は59×18mm15g・25は53×17mm14g・26は41×9mm5g。27は陶器C群ガラス坩堝。底径8.5cm。外底に厚さ6mm程の土製桃成台が熔着、これを打ち欠き破断面がさらに熔解。内底には水色ガラスが6mm程残り表面は銀化。破断面

Ph.8　SE01上面（西から）



Ph.9　SE01土層断面（東から）

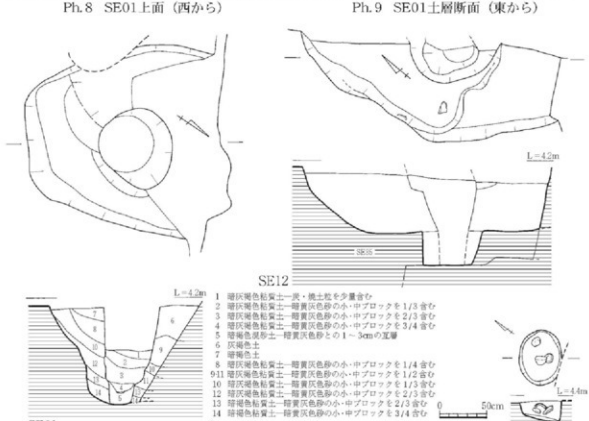


Fig.8　SE01・18（1/100）・B2SP3実測図（1/40）

にガラスが流れ熔解中に破断。28は土製ガラス熔解炉支脚。径10cm前後、全体が被熱で煉瓦状、上面は隅丸で中央が窪みガラスが熔着。29~38は瓦玉。29は瓦で29×12mm8g・30は瓦で21×17mm8g・31は土師器で29×10mm8g・32は土鍋で23×11mm7g・33は瓦で24×12mm7g・34は瓦で46×13mm24g・35は瓦で29×14mm13g・36は瓦質で26×8mm6g・37は瓦質で26×8mm5g・38は「河濱遺範」青磁碗で60×18mm89gを測る。39~41は滑石製品。39は双胴容器の未製品。径28×器高18mm。40は石鍋底部使用の環状石錘半欠品。径60厚16mm。孔径13mm。41は石玉半欠品。28×14mm。42は姪浜砂岩砥石。表裏と端の3面を使用。厚54mm。片面が溝状に減る。43は天草砥石。表裏と側・端の4面を使用。幅35厚14mm。44は赤間石の仕上砥。表裏と両側の4面を使用。幅30厚8mm。45は石英火打ち石。71×45×32mm。下端12mm程稜線が磨り減る。46は不透明水色熔解ガラス片。13.5×13×4mm。47は緑色ガラス製ハジキ。17.5×5mm4g。表面は厚く銀化する。48は「皇宋通寶」・49は「政和通寶」。13世紀後半。

SE16（Fig.16 Ph.26~29）D2グリッドに位置しSE01に切られる。径2m以上の堀方に径50cm高さ40cm弱の木桶を井筒として据える。以上は径を広げ上端で1.3mまで広がる。上面は小礫で30cm程埋める。井底レベルは1.2m程。

出土遺物（Fig.17 Ph.30）159~163は井筒出土。159は龍泉窯Ⅲ類小碗。160は口禿白磁碗。口径16.8cm。全面施釉後口唇・畳付の釉を掻き取る。161は口禿白磁小碗。口径7cm。162は湖美焼の甕胴部。外面粘土接合部に平行タタキ。この下位まで灰オリーブの自然釉が掛かる。外面露胎黒褐色内面暗灰褐色。163は土師器坏。口径12器高2.3cm。糸切り。橙色。164~165は堀方出土。164は白磁Ⅵ類碗。底径4.5cm。内底は釉輪状掻き取り。165は押圧文軒平瓦。顎高3.5cm。波紋を2段重ねる。灰色。166は青磁花盆の

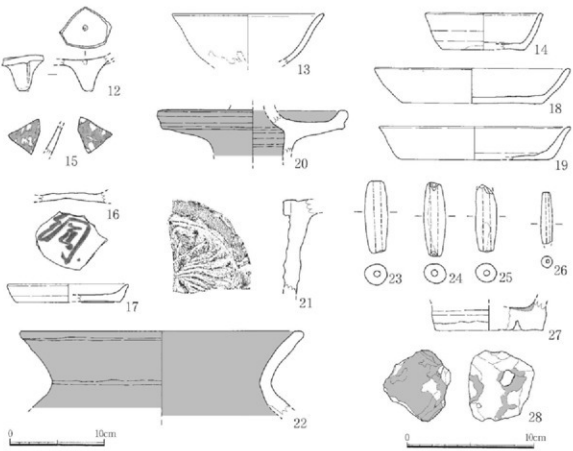
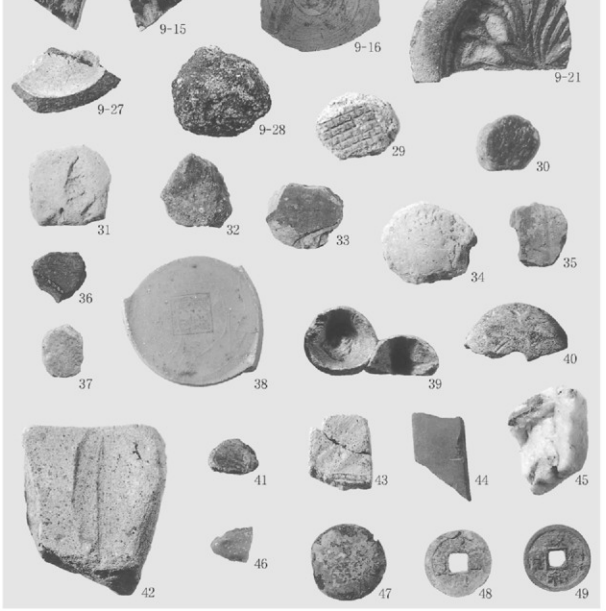


Fig.9 SE01出土遺物実測図（1/3・1/4）

フリル状口縁。167は青磁双層碗底部。168は龍泉窯系青磁平底皿。169は土師器土製人形（布袋？）片。170~173は瓦玉。170は瓦で29×22㎜19g・171は瓦で33×12㎜13g・172は土師器で42×9㎜11g・173は土師器で25×8㎜5g。以上13世紀後半。

3）**柱穴B2・SP3**（Fig.8 Ph.13）SX02下面で検出された径60深さ22cmの遺構で、底面から5cm程浮いた状態で土師器皿完形品2点・C群陶器鉢片を検出した。

出土遺物（Ph.14）土師器皿は口径9.4・9.5器高1.0cmでともに糸切り。81はC群褐釉陶器鉢で口径16cm程。内面から外面下位まで暗褐色半濁釉を施釉。胎土赤褐色。外面肩部に胎土目跡が残る。12世紀後半～末。



Ph.10 SE01出土遺物

4).**その他の第1面出土遺物**（Fig.11 Ph.14）　**75・76**は16世紀SE26出土。**75**は土師器鍋で口縁上面に三つ巴文スタンプを施す。**76**は朝鮮雑釉陶器甕で口径16.5cm。外面から内面上位まで鈍い黄色不透明釉を施釉。胎土暗赤褐色。口縁上面に貝殻痕が残る。**77~83**は近世SE20出土。**77**は志野焼の皿。口径14器高2.2cm。全面に灰白色長石釉を厚く掛け高台畳付~内面を掻き取る。ピンホールが多くあく。**78**は朝鮮雑釉**塊**で底径7.2cm。全面にオリーブ黄色の釉を掛け畳付を掻き取る。内底に胎土目。胎土は淡褐色。**79**は土師質の鍔鍋。内面は細かなヨコハケ外面に煤が付着。**82**はガラス製ハジキ・**83**は「崇寧重寶」16世紀。**80**はSK04出土瓦器**塊**。口径16.6器高5.4cm。口縁内外回転ナデ。腰

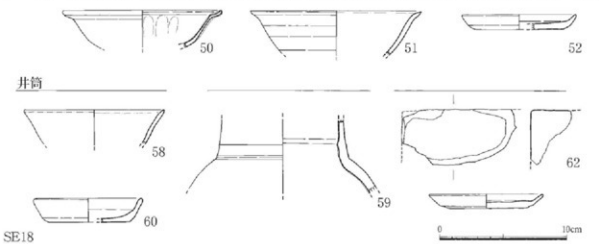
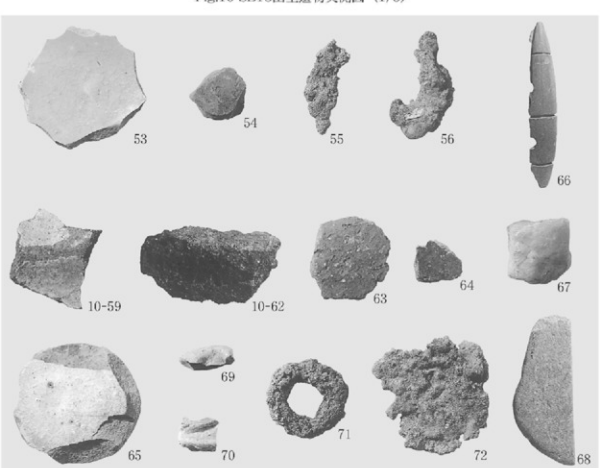


Fig.10 SE18出土遺物実測図（1/3）



Ph.11 SE18出土遺物

以下に板ナデ。底面は糸切り。灰白色で口縁内外黒変。12世紀前半。84~88は検出面。84は越州窯系青磁水注取手。85は白磁短頸壺。86は磁竜窯系緑釉壺で木葉文を陽刻する。87は土師器皿に青色ガラスが熔着する。88はキャップ状の銅製品で17×8.5㎜。89は撹乱土壙から検出「成進元寶」。

Ph.12　SE18上面（南から）

Ph.13　第1面B2SP3（南から）

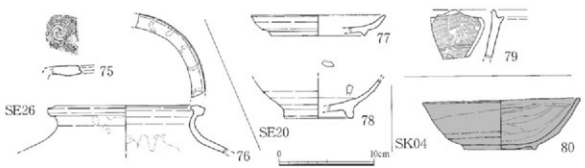
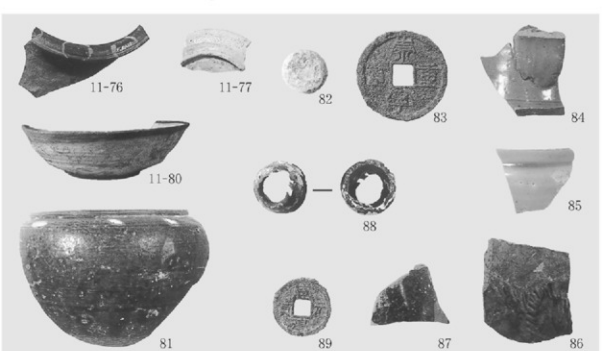


Fig.11 第1面出土遺物実測図（1/4）



Ph.14 第1面出土遺物

3．第２面の調査 (Fig.12 Ph.15)

第2面の調査は第1面より20cm程掘り下げた標高約4.3m、部分的に黒灰色粘質土、ほぼd層上面で実施した。検出した主な遺構は井戸4基・土壙11基・溝2条・他柱穴で、時期は11世紀後半から13世紀後半を中心とする。

Ph.15　第2面全景（東から）

1）土壙　調査区の全面で11基の土壙を検出した。炭粒を厚く堆積する土壙が目立つ。

SK28 (Fig.13 Ph.16・17) B3グリッドに位置し、1.25×1.13m深さ90cmを測る円形土壙で上面をSK14に切られ一部SK14と同時に掘削している。底面より60cm程上位に遺物が堆積する。

出土遺物 (Fig.14 Ph.20) 90~95は青磁。90・91は龍泉窯系劃花文碗。90は口径15.7器高7.3cm。91は口径16.5器高7.1cm。92は同安窯系Ⅱ類碗。口径17.4器高8cm。94は龍泉窯系平底皿。口径9.8器高2.3cm。見込みに劃花文。95は同安窯系平底皿。口径10.8器高2.0cm。93・96~98は白磁。96は碗で口径17器高7.1cm。外面下半に飛鉋状の回転ケズリで露胎。97は底径6.8cm。高台脇以下は露胎。93・98は平底皿。93は口径10.3器高3.2cm。半濁の厚い釉で見込みに劃花文。98は口径9.8器高3cm。99は青白磁合子蓋。口径5.5器高1.8cm。外面に型押し菊花文。100~106は土師器。100は高台付皿で口径8.8器高2.5cm。鈍い黄橙色。101・102は坏。101は口径15器高2.8cm。102は口径14.8器高2.9cm。ともに外底糸切り後板圧痕。103~106は皿。103は口径9器高0.8cm。糸切り後板圧痕。104は口径9.1器高1cm。糸切り後蓆圧痕。105は口径8.9器高1.1cm。糸切り後板圧痕。107・108は滑石製品。107は1類鍋の転用温石。122×71×20mm。径14mmの2孔穿孔。108は1類鍋の取手部の転用。71×42×34mm。102g以上。錘か。109は鏃の断片。

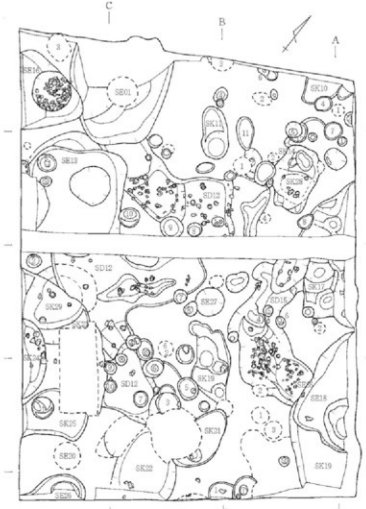


Fig.12 第2面遺構全体図（1/100）

69＋α×33厚11㎜。110は釣針か。44×27径8㎜7g。111・112は炉壁。111は厚42㎜。3㎝弱の粘土帯を積んだ炉壁の内側に1.5㎝程砂質粘土を貼りこれが5㎜程還元焼成され表面が熔解してガラス化する。縦方向にも緩く内湾する。112は厚2.5㎝前後の組成形の炉壁粘土が剥がれたもの。内側3㎜程還元焼成され表面が熔解してガラス化する。内面直線的。
ガラス熔解炉か。12世紀中～後半。

SK29（Fig.13 Ph.16・17）D4グリッドに位置し、1.57×1.8＋αm深さ130㎝を測る円形土壙で上面をSK23に切られる。深さ50㎝程の上部と径1.15m深さ60㎝程の下部の二重土壙で、炭灰の堆積が著しく殊に下部では1回で20㎝近く堆積し、床上から延べ10面にわたって厚く堆積している。火を用いる作業場での炭灰の廃棄土壙である。遺物は7層・16層炭灰中に集中する。

出土遺物（Fig.15 Ph.20）113・114は高麗青磁。113は口径15器高6.9㎝。灰オリーブ半濁釉を全面に掛け畳付けを掻き取る。内底に重ね焼き痕が残る。胎灰色。114は外面にケズリを残す。釉は灰

Ph.16 SK28上面（南から）

Ph.17 SK28完掘状況（東から）

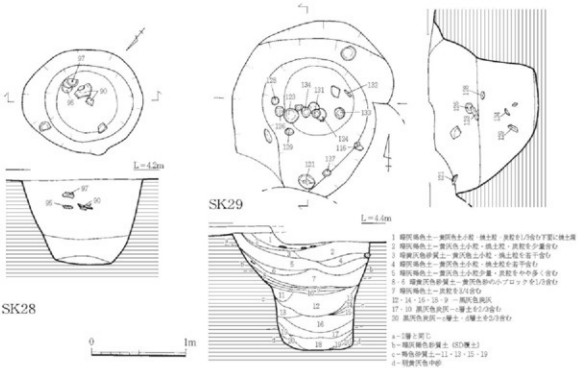
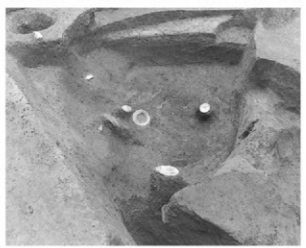


Fig.13 SK28・29実測図（1/40）

オリーブで透明。115~119は白磁。115~117は碗。115はⅣ類。口径16.4器高6.8cm。116は0類。口径14.4器高5.3cm。灰白透明釉。117はⅥ類。口径17.8cm。青味がかった透明釉。118・119は平底皿。118は口径9.6器高2.2cm。内底に線刻蓮線文。オリーブがかった灰色透明釉。119は口径10.2器高2.5cm。内底に渦花文。オリーブがかった灰白透明釉。120は黒釉天目碗。口径13器高5.2cm。露胎褐灰色121~139は土師器。坏・皿は全てヘラ切り。殆どの外底に板圧痕。121~125は丸底坏。外面腰部に指頭圧痕ヘラ押し痕。121は口径15.4器高3.9cm。鈍い黄橙色。122は14.6×2.9cm。内面ヘラ当て痕。浅黄橙色。123は14.3×2.9cm。内面ヘラ当て痕。鈍い橙色。125は14.2×2.3cm。内面ヘラ当て痕。

Ph.18 SK29上部土層断面（西から）



Ph.19 SK29上面（南から）

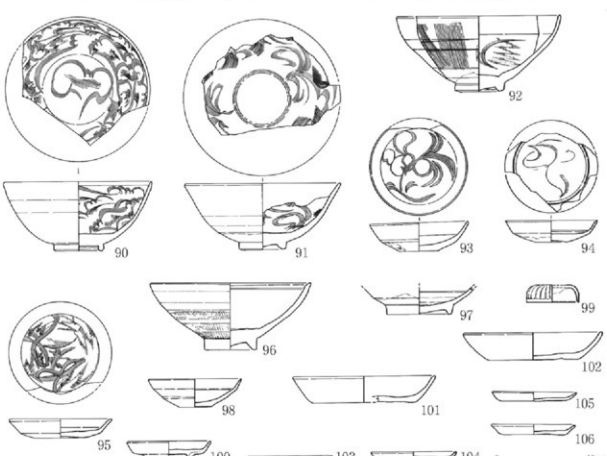


Fig.14 SK28出土遺物実測図（1/4）

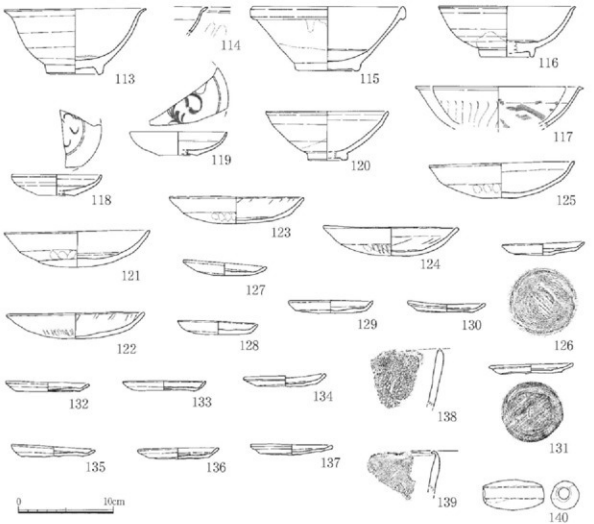


Fig.15 SK29出土遺物実測図（1/4）

Ph.20 SK28・29出土遺物

Ph.21 SK29下部土層断面（南から）

Ph.22 SK29下面（南から）

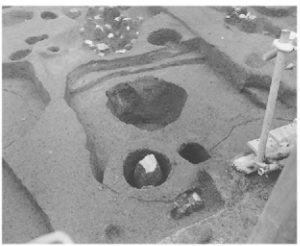
灰黄褐色。126~137は皿。126は口径8.7器高1.4cm。鈍い橙色。127は8.8×1.4cm。鈍い黄橙色。128は8.5×1.5cm。褐灰色。129は9×1.3cm。鈍い黄橙色。130は8.4×1.2cm。黄橙色。131は8.9×1.2cm。淡橙色。132は8.9×1.2cm。淡橙色。133は8.9×1.0cm。浅黄橙色。134は8.8×1.3cm。淡橙色。135は8.9×1.3cm。浅黄橙色。136は8.6×1.2cm。淡橙色。138・139は焼塩壺。ともに外面指頭圧痕・ナデ内面布圧痕。138は口唇が外傾し明赤褐色。139は口唇が内側に巻く。鈍い黄橙色。140は管状土錘。65×32㎜59ｇ。141は鉄製刀子で刃部大半を欠く。中茎に木質が残る。現況で83刃幅15刃厚4㎜。11世紀末～12世紀初頃。

2）**井戸**　井戸は調査区の東西方向にSE13~SE18が並ぶように分布し、4基を検出した。第1面検出の井戸もこの列の中で切り合い堀方もこの面で検出された。

SE13（Fig.16 Ph.23・24）D3グリッドに位置し、溝SD12を切る。径3.1mの堀方内北東寄りの上部に径1mの井筒を検出していたが、これは深さ80cm底面高3.4m程で止まり、別の土壙であることが確認され、堀方掘削中底面近くで、北西側に径1.2mの井筒を検出した。井戸廃棄後井筒を抜き去ったものと考えられる。井筒の底面検出は作業上崩落の危険性が高く、断念した。

出土遺物（Fig.17 Ph.25）142は井筒出土の印花文口禿青白磁皿。口径10器高2cm。143~158は堀方出土。143~146は青磁。143は龍泉窯系Ⅱ-2類碗。内底にハリ状の目跡がある。外底にはトチン表面が熔着。底径5.6cm。144は同安窯系Ⅰ類碗。底径4.4cm。145は鎬連弁文香炉。内側に屈曲した口縁以下は露胎。146は外面に太い猫掻き文。見込みに輪状掻き取り。底径6.8cm。147は白磁平底皿Ⅵ類。見込みにヘラ描き劃花文。釉は黄味がかった白濁釉。外底に墨書「吉花押」。底径3.6cm。148は磁州窯系鉄絵盃托受部片。径7.1cm。149は褐釉陶器小口瓶。口径3.6cm。内外に暗褐色釉を掛ける。胎土鈍い赤褐色。150は陶器C群ガラス坩塙。底径10cm。内面に緑色ガラスが薄く残る。外面に赤黒ガラス少量付着。胎土淡褐灰色。151は土師器皿。口径8器高1.1cm。外底糸切り板圧痕。152~156は瓦玉。152・153・156は青磁碗底部で152は70×17㎜114g・153は65×15㎜153g・156は66×17㎜82g・155は白磁碗で29×17㎜14g。157はⅡ類石鍋の再加工素材。下・左辺を面取り。復元口径21cm。鍔下に煤付着。158は径58cmの裁頭円錐形滑石盤の下面に径9㎜の小穴が7つ以上回転により穿つもので弓引き・舞錐等の軸受けと考える。以上13世紀後半～末。

SE18（Fig.8 Ph.12）　A5グリッドに位置し、溝SD15・SE35を切る。径4.1m以上の堀方中央にさらに径1mの2段掘りで、中に径45・高さ50cm程の桶を井筒として据える。底面高2.7mと高い。



Ph.23 SE13上面（西から）

Ph.24 SE13土層断面（北東から）

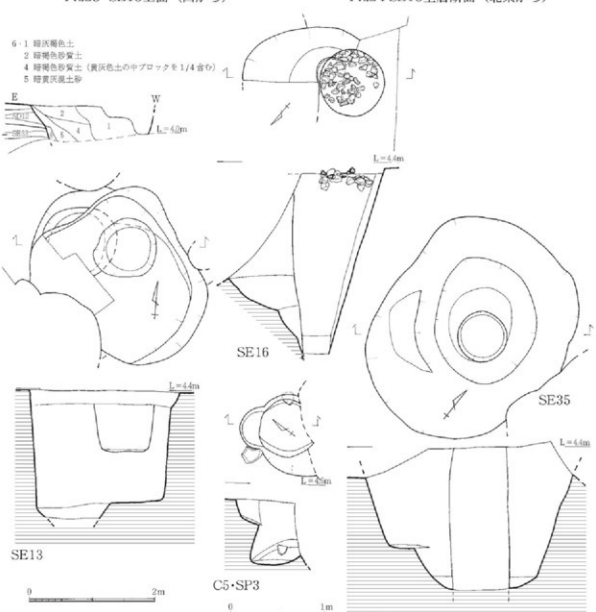


Fig.16 SE13・16・27（1/60）・C5SP3実測図（1/40）

井筒を抜き取ったのか上方は径1.1mまで広がる。

出土遺物　(Fig.10 Ph.11) 50は青磁Ⅲ類小鉢。内面に凹線連弁文。51は口禿白磁碗。胎白色。52は土師器皿。外底糸切り。鈍い黄橙色。53・54は瓦玉。53は白磁碗底部82×21㎜102g・54は瓦34×15㎜17g。55・56は鉄器。55は柳葉形鏃で刃部長52幅21厚6㎜。中茎は途中で欠損。中央で「く」字に曲がる。56は釣針。37×21径6㎜。58~76は堀方出土。58は口禿白磁坏。オリーブがかった白色半濁釉で胎淡灰色。59は陶器ガラス坩塝。内面に緑色ガラスが薄く残り表面は銀化。暗灰色。60・61は土師器。ともに外底糸切り板圧痕。橙色。60は坏。61は皿。62は土製方柱状支脚。隅角破片で長8幅4cm以上。粗砂礫を多量に含みざらで瓦質。63~65は瓦玉。63は焼塩壺41×10㎜13g・64は陶器22×9㎜6g。65は白磁碗57×19㎜66g。66は九州型有溝石錘の1/4破片。復元長115幅27厚30㎜。泥岩製。弥生時代後期の混入。67は石英火打ち石で先端26×20㎜範囲程の稜線が敲打で荒れる。1/4破片で厚22㎜。68は結晶片岩手持ち砥石。杏形の扁平礫を使用。上面を主に両側面を若干利用。101×15×40㎜92g。69・70は熔解ガラス片。69は緑色透明・70は水色不透明でともに銀化。

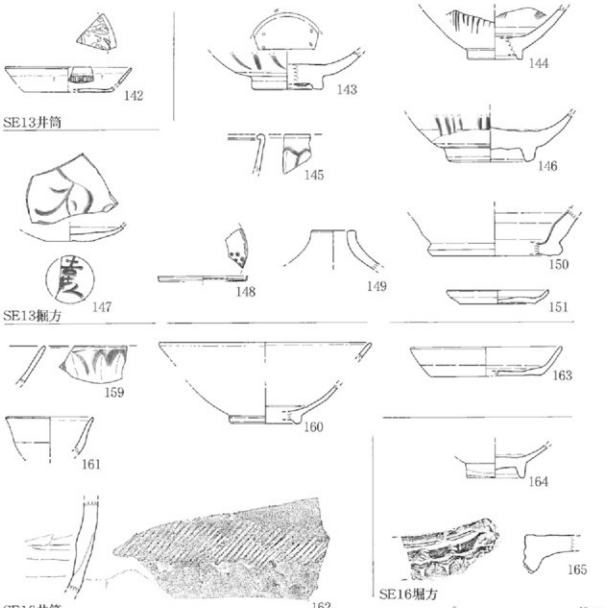
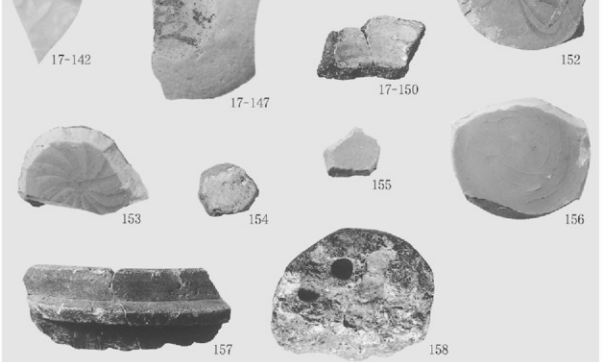


Fig.17 SE13・16出土遺物実測図 (1/3)

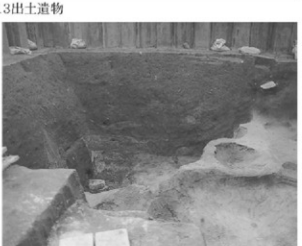
71は鉄環。外径31内径14㎜。72は椀形滓。94×91×40㎜。径80㎜程の2個が上下で熔着。上面は一部ガラス化。下面は砂が全面付着。以上13世紀後半～14世紀初頭。

SE27（Fig.16 Ph.31・32）調査区中央C4グリッドに位置し、SE35溝SD12・15に切られる。径3.6mの円形堀方内をさらに径2m掘り下げ径90cmの桶を井筒として据える。2.3m上面まで径は殆ど変わらず同径の桶を積み上げたものと思われる。2段目の堀方70cm下までは検出したが、崩落の危険性が高まったため底面の検出は断念した。現況で底面高2.1mであと1mは下がると思われる。井筒上部1m程には多量の小割した焼土塊が出土している（Ph.31）。



Ph.25 SE13出土遺物

Ph.26 SE16上面（西から）

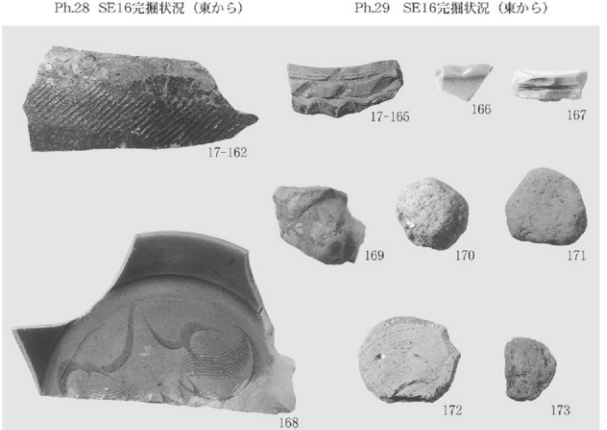


Ph.27 SE16完掘状況（南から）

出土遺物　(Fig.18 Ph.33) 174は同安窯系青磁Ⅰ類碗。口径15器高6.4cm。内底にトチン表皮が熔着。175は白磁Ⅸ類碗。見込みの釉を輪状掻き取り。内底にハリ状の目跡。外底はトチン表皮が熔着。176は白磁平底皿０類。口径10.2器高3.6cm。見込みに片切彫り劃花文。177は陶器C類ガラス坩堝。底径7.8cm。内面ガラスが薄く残存、銀化し色調不明。外面も一部ガラスが付着。外底は円形に土製支脚表皮が熔着。露胎暗灰色。178は古代混入の須恵器皿。口径15器高1.7cm。179・180は瓦器埦。179は口径15.8器高6.2cm。灰白、外面と口縁内面は黒灰色。180は和泉型で口径14.8器高5.5cm。見込みに格子状ケンマ。灰黒色。181は墨

Ph.28　SE16完掘状況（東から）

Ph.29　SE16完掘状況（東から）



Ph.30　SE16出土遺物

書「得美」白磁平底皿。182は同安窯系Ⅱ類碗の重ね焼き焙着破片。183は高麗無釉陶器寮底部。底径17㎝。内外光沢黒灰色胎土紫褐色。184は朝鮮雑釉盤口壺。口径15㎝。内外にオリーブ褐色の不透明釉。胎土紫褐色。185は和泉型瓦器塊底部片。底径5㎝。186~192は瓦玉。186は瓦質甕30×8㎜9g・187は瓦器皿37×6㎜周縁磨り取り・188は瓦25×13㎜9g・189は瓦26×12㎜10g・190~192は白磁底部で190はⅥ類65×28㎜92g・191はⅨ類78×18㎜・192はⅣ類81×22㎜117g。193は暗灰色泥岩風字硯未製品。68×50×11㎜。裏面は海を彫りかけ中断。194はⅡ類石鍋片。口径32.4㎝。口唇・内面は丁寧に磨く。195は長石凝岩円礫杏形手持ち砥石。79＋α×57×45㎜。上面を主に両側を使用。外周は敲打に用いる。196は中粒砂岩円礫手持ち砥石。69×34×15㎜43g表裏2面を使用。197は水色透明ガラス小玉。表面銀化。径6.3長3.2㎜孔径2.9㎜。198~202は古代混入瓦。198・199は丸。198は押圧文に伴う厚12㎜の薄手縄目叩き。199は須恵質。中に「＊」文の斜格子叩き。側面ヘラ切り折断。厚16㎜。200~202は平。200は平行叩き側面取り。厚26㎜。201は乱れた二重格子叩き。厚20㎜。202は粗い斜格子叩き側面取り。厚21㎜。以上12世紀中~後半。

Ph.31　SE27井筒土層断面（西から）

Ph.32　SE27堀方上端（西から）

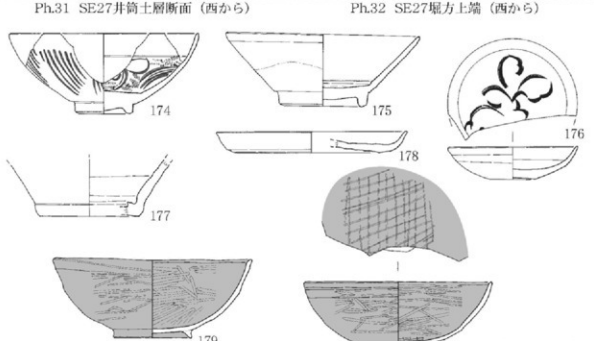
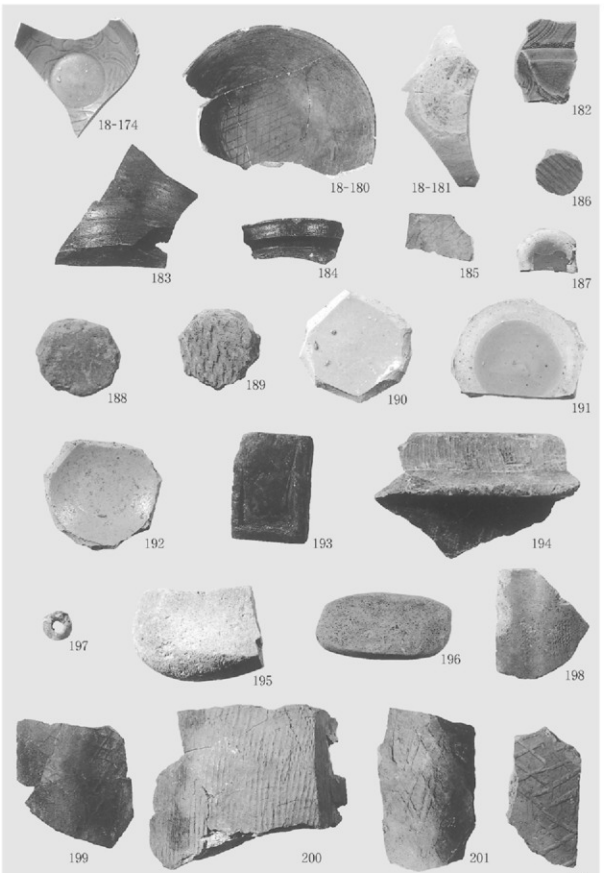


Fig.18 SE27出土遺物実測図（1/3）



Ph.33 SE27出土遺物

3)溝　溝は調査区西半部で「クランク」状に2度屈折するSD12と、調査区中央東で、磁北に沿って方形に区画する溝の南西隅部分のSD15の2条を検出した。第1面で検出した硬化面はこれらを覆うように敷設されている。

SD12（Fig.19 Ph.34・35）C3~C5グリッドにかけて3m程毎に「クランク」状に屈折する幅1.2m深さ30cm程の溝で、SD01・13に切られる。底面に黄灰色粘土を多量に含む暗灰褐色土で10cm弱目張り状に客土し、以上には暗灰褐色土が自然に堆積し、2層に砂を少々含むが水が流れた状態ではない。遺物は小片を主に1・2層中から出土し、北部に多い。

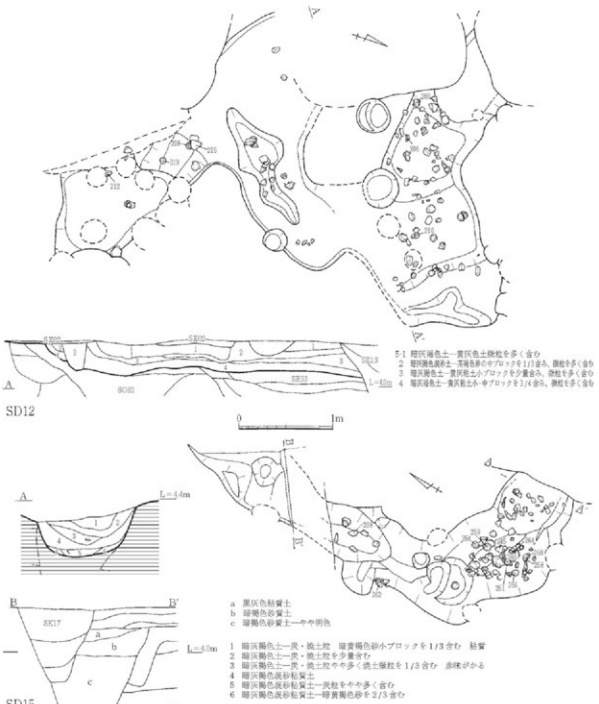


Fig.19 SD12・15実測図（1/60・1/40）

出土遺物　(Fig.17 Ph.25) 203は龍泉窯系Ⅱ類碗。口径16.4器高7.3cm。外底にトチンが熔着する。204は龍泉窯系の見込みに茶溜まりを作る小碗で底径3.4cm。釉暗オリーブ灰色透明胎暗灰色。205は口禿印花文青白磁皿。口径10器高1.9cm。206~210は白磁。206は壺。口径9.5cm。釉灰オリーブ透明胎灰色。207は天目碗様ベタ高台。底径3.8cm。釉灰白透明・外面灰色露胎。208・209は高台付皿Ⅱ類。見込み輪状掻き取り。胎灰白色。208は口径9.7器高2.5cm高台脇飛び鉋状ケズリ。209は口径9.8器高2.8cm。210は平底皿Ⅲ類。口径10.4器高2.1cm。211・212は天目碗。211は口径11.2器高5.1cm。釉黒褐色胎褐灰色。212は口径10.8器高4.8cm。釉黒褐色胎鈍い橙色。213はC群陶器ガラス坩塙。底径10.4cm。内面に緑色ガラスが薄く遺存。表面銀化。露胎暗灰色。器壁が厚い。214は無釉陶器銅坩塙。外面タテハケ。内面銅滓熔着し暗赤色。一部緑青が吹く。胎土灰褐色。215はC群捏鉢。口径33cm。褐色。216~223は土師器。いずれも回転糸切り板圧痕。216~218は坏。216は口径15器高2.5cm橙色。217は14.2×1.9cm。橙色。218は15.2×2.3cm。浅黄橙色。219~223は皿。219は口

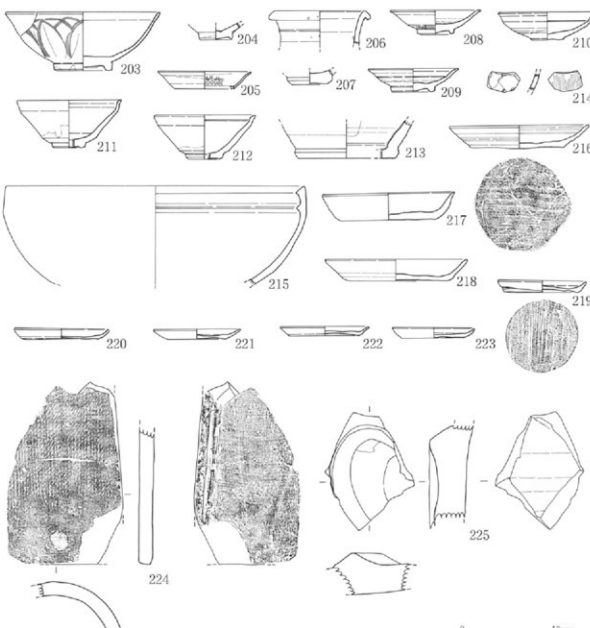


Fig.20 SD12出土遺物実測図 (1/4)

Ph.34 SD12（東から）

Ph.35 SD12遺物出土状況（西から）

径9.5器高1.4cm淡橙色。220は10.1×1.2cm。橙色。221は9.2×1.0cm。鈍い黄橙色。222は9.4×1.0cm。橙色。223は8.8×1.2cm。鈍い黄橙色。224は縄目叩き丸瓦。側面ヘラ切り折断。厚15mm。225は鬼瓦眉部分か。厚43mm。内面ヨコナデ。226は「人面」墨書土師器坏か。227~229は瓦玉。227は土師質40×12mm19g・228は瓦20×10mm4g。周縁磨り取り・229は瓦25×21×20mm13g6面磨り取り。230は青色透明ガラス玉。径10.5長10mm孔径3.3mm2g。231はガラス炉壁。8mm厚平板状の真土の表面が熔解してガラス化し沸騰して多数の小気泡の軽石状。裏にスサ粘土が5mm程残る。232~234は鉄器。232は刀子。両端を欠損。刃幅19刃厚6mm。中茎9×3mm。233は釘。全長97mm。234は鏃残欠。断面10×8mmの方形。以上13世紀前半~14世紀初頭。

SD15（Fig.19 Ph.36・37）B3~5グリッドにかけ、N—4°—Eに方形に区画する溝の南西隅部分で幅0.9~1.52m深さ30~80cm程を測る。底面は北に下がり、下方に粘質土が堆積し水が貯留した可能性がある。SE18に切られる。遺物は南部を中心に2・3層中から土師器坏を多く出土する。

出土遺物　（Fig.21 Ph.38）235~237は龍泉窯系青磁。235・236はⅢ類鎊口縁小鉢。青緑色半濁釉を厚く掛け胎灰白色。内面に凹線の連弁を施す。237はⅢ類碗。口径15cm。胎灰白色。238~242は白磁。238はⅡ類碗。口径15.5器高5.7cm。内面を白堆線で6分割する。見込みは段を成す。灰白釉・胎灰白色。239はⅥ類碗。底径6.3cm。見込み輪状掻き取り。釉灰白色胎灰白色。240は長瓶口縁。口径8.1cm。釉灰白色胎灰白色。241は口禿坏口縁。釉灰白色胎灰白色。242は高台付皿Ⅱ類。口径8.9

Ph.36 SD15（南から）

Ph.37 SD15遺物出土状況（北から）

器高2.1cm。釉灰白色胎灰白色。見込み輪状掻き取り。243はB群暗褐釉陶器無頸壺。口径14cm。口縁上面は釉掻き取り。244は天目小碗で口径10cm。245~261は土師器。全点回転糸切り。246・251・253~256・258・259には板圧痕。245~256は坏。245は口径12.5器高2.8橙色。246は12.4×2.6鈍い黄橙色。247は12.6×2.7鈍い黄橙色。248は11.8×2.6鈍い黄橙色。249は13.0×2.9鈍い橙色。250は12.2×2.6橙色。251は12.7×2.7鈍い黄橙色。252は11.5×2.7鈍い橙色。底部粘土接合面にも糸切り痕。253は13.1×2.4鈍い橙色。254は12.5×2.4鈍い黄橙色。255は12.5×2.6橙色。256は12.5×2.6橙色。257~260は皿。257は8.0×1.4鈍い橙色。258は7.7×1.1鈍い黄橙色。259は8.4×1.3橙色。260は7.6×1.1鈍い橙色。261は焼塩壺径9.2cm以上。外面指頭圧ナデ鈍い黄橙

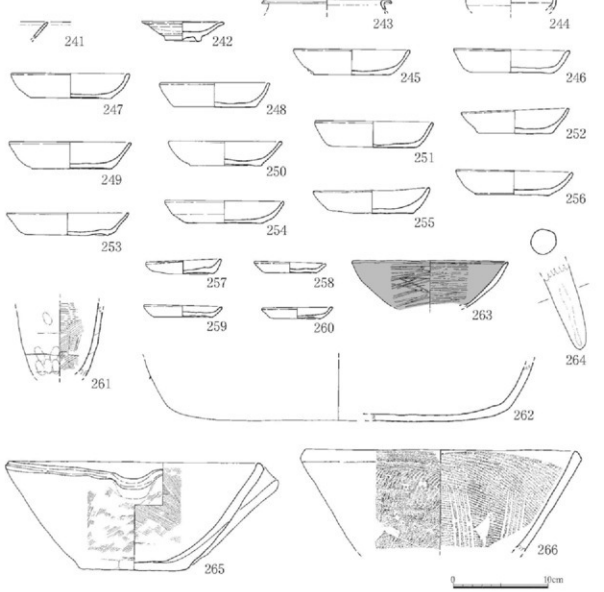
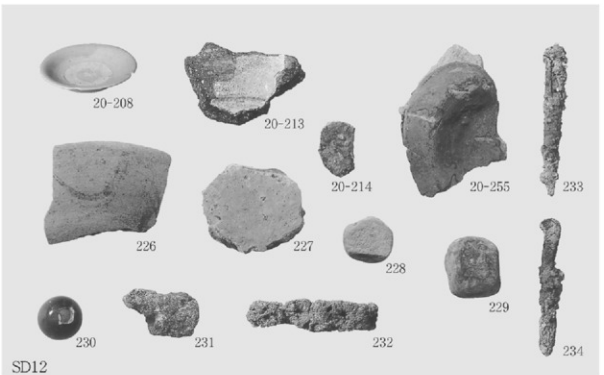
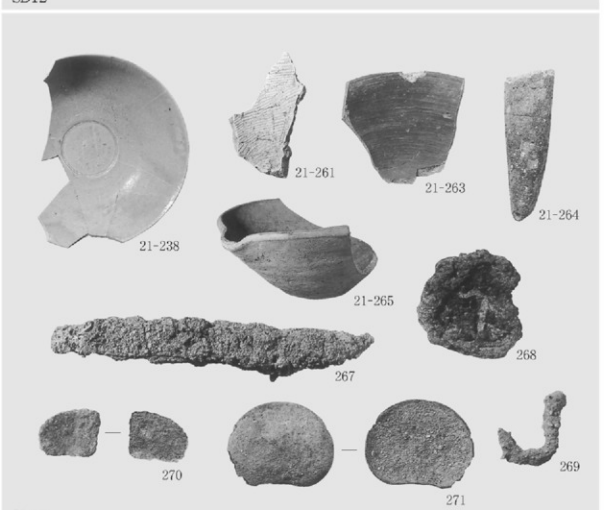


Fig.21 SD15出土遺物実測図（1/4）

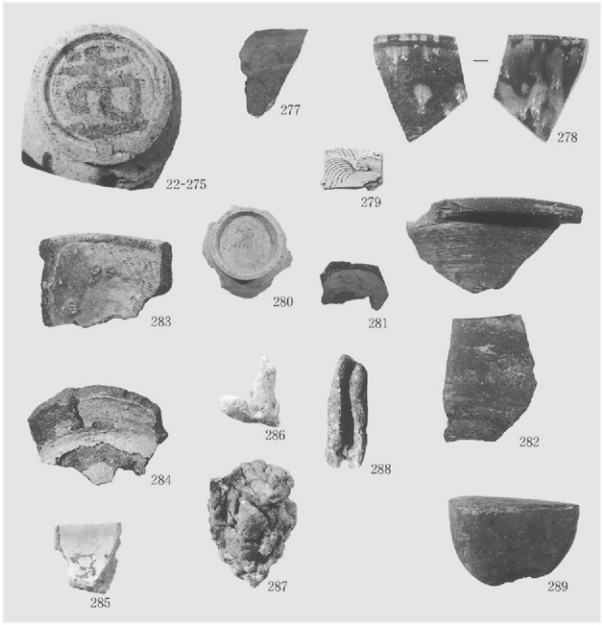




Ph.38 SD12・15出土遺物

Ph.39　C5・SP3土層断面（南から）

Ph.40　C5・SP3（南から）



Ph.41　包含層1層他出土遺物

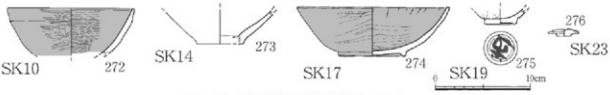


Fig.22 第2面出土遺物実測図（1/4）

色。内面ハケ明黄褐色。262は土師質鍋底部。径37.6cm。内外ナデ橙色。263は楠葉型瓦器**埦**。口径16.7cm。264は土製土器窯焼成台か。径2.8cm。褐灰～橙色。265は瓦質捏鉢。口径27.7器高11.5cm。266は瓦質擂鉢。口径30cm。外面ハケ内面ナナメハケ後5条の擂目。267～269は鉄器。267は包丁。中茎の一部を欠損。全長30刃渡り20.6刃幅2.7cm刃厚6mm。中茎9.2cm断面17×6mm。268は紡錘。紡輪径44厚9mm。紡茎は径4mmで上下とも欠損する。269は釣針。30×23径6mm。270は小鉤状の銅製金具。19×15×4mm。271は笠状の鈕型銅製品。33×26×4.5mm。以上13世紀後半。

4）**柱穴・その他の出土遺物**（Fig.22 Ph.39） **C5・SP3**は（Fig.16 Ph.39・40）調査区南のC5グリッドに位置するPitで、SD12を切る。上面で径67深さ75cmの円形遺構で、下面が外方に抉り込む。覆土は底面から上面までほとんど炭粒灰で埋まっており、SK29同様炭灰の廃棄土壙である。壁面に被熱痕跡はない。床上10cm程で瓦器**埦**が出土した。12世紀前半。

272はSK10出土楠葉型瓦器**埦**。口径13.5cm。内外灰白～黒色。273はSK14出土越州窯系青磁碗。底径5cm。内外に灰オリーブ釉を施釉後畳付を掻き取り。胎黄灰色。274はSK17出土瓦器**埦**。口径16.2器高5.2cm。内面黒色。外面灰白～黒色。275は墨書「花押」天目碗。底径3.7cm。276は白磁壺形合子蓋。径3.4cm。277はB4・SP4出土和泉型瓦器盤底部。内面にケンマで連結弧文。

5）**包含層1層出土遺物**（Fig.16 Ph.41）1～2面間の暗褐色混砂土等を包含層1層とした。278は吉州窯玳皮天目碗口縁片。279は磁州窯白地鉄絵盤底部片。外面露胎。280は墨書「僧」白磁碗。281は文琳茶入れ底部。底径3.2mm。282は高麗無釉陶器甕。283・284はC群陶器ガラス坩堝。285は使用の浅い土師器坩堝。径9.6cm。外～口縁内面淡灰褐色。以下黄白色。286は青透明熔解ガラス片。表面銀化。24×21×9mm。287は熔解した方解石で青灰色に発色。ガラス素材。一部に炉壁が熔着。44×32×23mm。288は板を折り曲げた噛み潰しタイプの有溝鉛錘。28×11×10mm16g。289は泥岩手持ち砥石。円礫を鋸引きで半裁。切断面を使用。26×51×21mm。

4．第3面の調査（Fig.23 Ph.42）

第3面の調査は第2面より30cm程掘り下げた標高約4.0m、暗褐色砂風成層（f層）上面で実施した。検出した主な遺構は井戸2基・土壙9基・溝2条・他柱穴で、時期は11世紀後半から12世紀後半を中心とする。

1）**土壙** 調査区の全面で9基の土壙を検出した。2面程ではないが炭粒を堆積する土壙が目立つ。

SK34（Fig.24 Ph.43・44）調査区中央のC3グリッドに位置し、土壙SK33・43に挟まれ、43を切

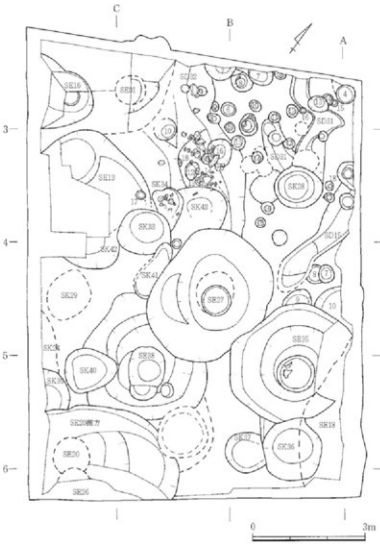
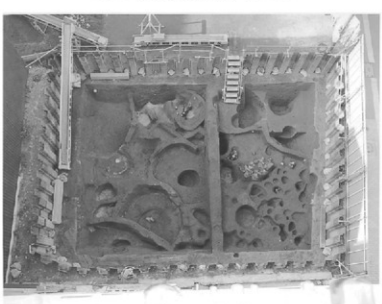


Fig.23 第3面遺構全体図（1/100）



Ph.42 第3面全景（東から）

り33に切られる。78×115深さ115cmを測る楕円形土壙で、底面より90cm程上位の炭灰層中に遺物が堆積する。

出土遺物　(Fig.25 Ph.47) 290は同安窯系高台付皿。口径14.4器高3.6cm。外底に墨書「得銅」。291は青白磁印花文合子蓋。口径6.6器高1.4cm。292～295は白磁。292は四耳壺。肩径17cm。外面畳付まで と内面口頸部・底面に灰白色透明釉を掛ける。胎灰白色。293はⅡ類碗。口径16.5器高6.2cm。294は小碗。口径10.9器高3.9cm。釉黄味を帯びた白色・胎灰白色。295は高台付皿Ⅱ類。口径9.7器高2.8cm。釉灰白不透明。胎淡黄色。296は陶器無頸四耳壺で口径15胴径50.6cm。外面肩部の平行タタキ痕内面無文当て具痕。丸印人物・「奉」字文を施す。オリーブ褐色半濁釉と下位に海鼠釉を施す。内面露胎。胎土灰赤～暗赤褐色。297～312は土師器。全点回転糸切り。301・303以外には板圧痕。297～303は坏。297は口径16器高3.2cm。浅黄橙色。298は16×3.3浅黄橙色。299は16.3×3.2浅黄橙色。300は15.6×3.4橙色。301は15.2×3.1橙色。302は15.5×2.6橙色。内底に輪状炭化物付着。灯明皿に使用。303は15×2.9cm。外底ナデ消し。鈍い黄橙色。304～312は皿。304は口径8.7器高1.1cm。橙色。305は8.6×1.1橙色。306は8.8×1.2橙色。307は8.9×1.1鈍い黄橙色。308は9.2×1.1橙色。309は9.3×1.3橙色。310は9.0×1.1橙色。311は9.0×1.1橙色。312は8.9×1.1cm。橙色。313は土師器浅鉢形焼塩壺。口径6.8cm

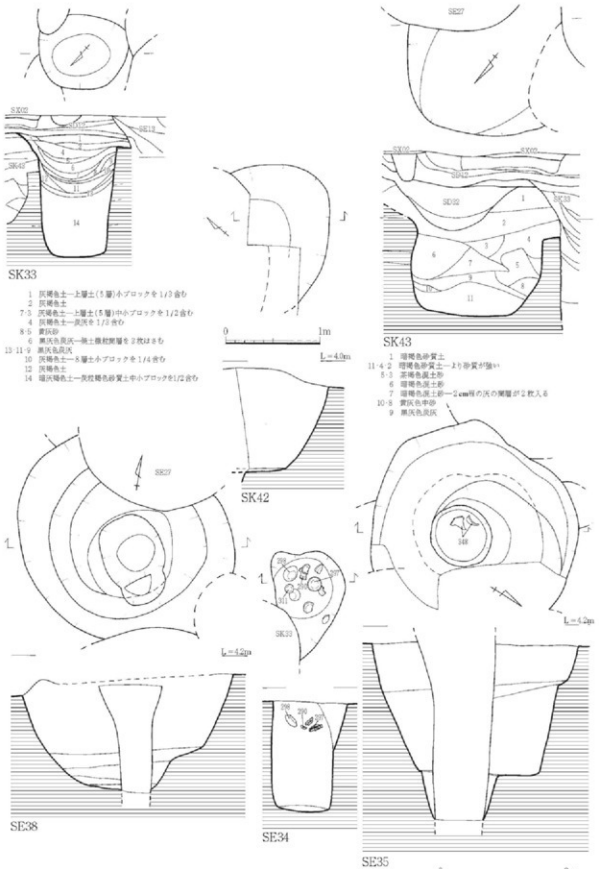
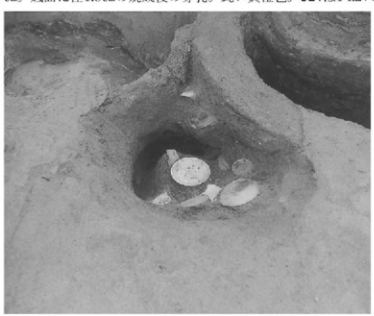


Fig.24 SK33 (1/60) 34・42・43 (1/40) SE35・38実測図 (1/60)

外面指頭圧にナデ内面は丁寧なナデ。橙色。314は粗粒砂岩製石錘。敲打と粗い研磨で方柱状に成形し面取り。表裏横断面が緩い凹面を成す。78×28×14mm56g。315は圭頭形鉄鏃。全長68刃部長39刃幅18刃厚9mm。以上12世紀中～後半。

SK42（Fig.24）D4グリッドに位置し、1.45＋α×1.0＋αm深さ110cmを測る円形土壙で北半部をSE13に切られる。

出土遺物　（Fig.26 Ph.47）316・317は龍泉窯系青磁。316はⅠ類碗。口径15.5器高6.5cm。灰オリーブ透明釉を高台内側まで掛け外底に輪状の胎土目を残す。胎淡灰色。317は輪花小碗。口径11.5cm。オリーブ灰色透明釉。胎暗灰色。318は青磁碗。口径16.6cm。外面に片切彫りの太い猫掻き文。釉灰褐色。胎鈍い橙色。319はⅥ類碗。底径6.2cm。オリーブがかった灰白釉。見込みに輪状掻き取り。胎淡灰色。320～325は土師器。全点回転糸切り板圧痕。320～322は坏。320は口径15器高2.8cm。底面に径1.5cmの焼成後の穿孔。鈍い黄橙色。321は14.2×3.0橙色。322は14.5×3.0橙～褐灰色。323～325は皿。323は口径8.2器高1.1cm。鈍い橙色。324は8.9×1.5浅黄橙色。325は9.2×0.9浅黄橙～灰褐色。326は押圧文軒平瓦。3段の波文を重ねる。顎高4cm。以上12世紀中～後半。



Ph.43　SK34遺物出土状況（北から）

SK43（Fig.24 Ph.45）C3グリッドに位置し、SE27・SK34・SD32に切られる。1.5×1.35＋αm深さ137cmを測る深めの円形土壙で、床上30cm程に10cm弱炭灰層が堆積後、土混じりの砂で埋め戻される。

出土遺物　（Fig.26）327は龍泉窯系青磁Ⅰ類碗。口径15.8器高7cm。オリーブ黄色透明釉を高台際まで掛け外底は露胎。見込みに圏線を施す以外は無文。胎淡灰色。328は白磁Ⅳ類碗。口径15.6器高7cm。被熱し釉は黄味を帯びた灰白色。胎浅黄橙色。329は土師器坏。口径15.6器高2.8cm。外底は糸切り。外面褐色内面鈍い黄橙色。以上12世紀中～後半。

Ph.44　SK34完掘状況（西から）

SK33（Fig.24 Ph.46）C3グリッドに位置し、SK41に切られSK34を切る。1.5×1.2m深さ195cmを測る深い円形土壙で、深いため井戸として掘削を続けたが井筒が検出されず、底面高は2.45mと他の井戸より1mほど高く、土壙と判断した。床上1m程か

Ph.45 SK43土層断面（北から）

ら5面にわたって10cm弱炭灰層が堆積しており、炭灰等の廃棄物処理土壙と考えられる。

出土遺物　(Fig.27 Ph.47) 330高麗青磁碗。口径14.8器高6.7cm。被熱し、釉はオリーブがかった灰白色不透明で高台際まで。胎橙色。見込みに圏線。333は同安窯系青磁Ⅰ類碗。外面は粗い6本単位の櫛掻き文。口径17cm。釉は灰オリーブ透明。胎は黄みがかった灰色。331は白磁Ⅱ類碗。口径15.6器高7.4cm。青みを帯びた乳白色釉を外面下位まで。胎は細砂を含み灰白色。見込みは段。332は白磁平底皿Ⅴ類。口径10.2器高3.6cm。釉はオリーブがかった灰白色不透明で外半まで。胎暗灰色。

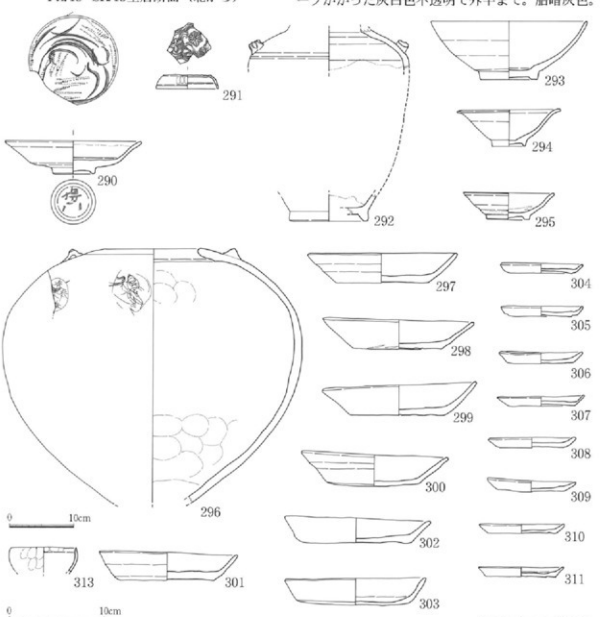


Fig.25 SK34出土遺物実測図（1/4）

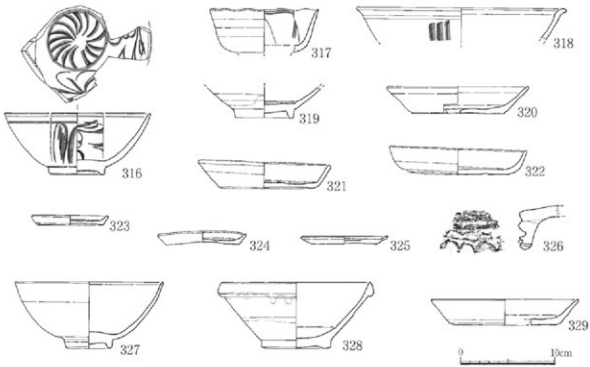


Fig.26SK42・43出土遺物実測図（1/4）

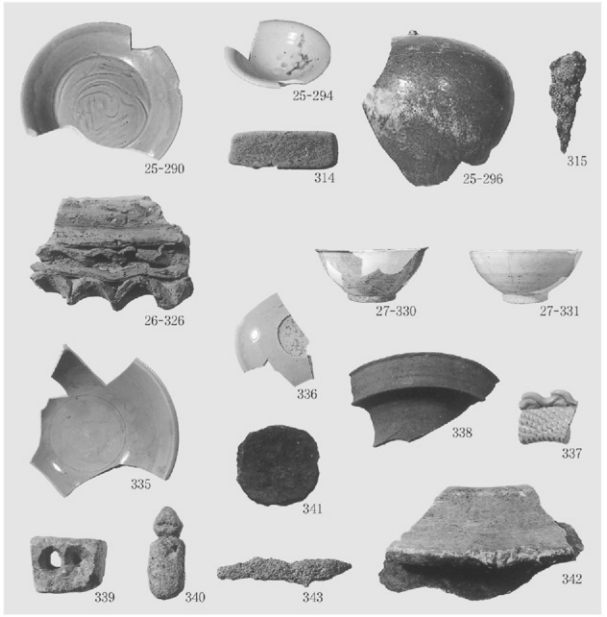
Ph.46 SK33上部土層断面（北から）

334は白磁Ⅶ類6輪花碗。内面輪花下に白堆線。口径17.4器高6.3cm。青みを帯びた透明釉で高台脇まで。輪状掻き取り。胎灰白色。335は白磁Ⅵ類碗。口径18.8器高7.6cm。内面圏線下に櫛描文。釉黄みがかった灰白透明。胎灰白色。336は墨書「馬安」白磁平底皿Ⅵ類。見込みに劃花文。337は白磁盤龍形取手。幅34厚20mm。釉青みがかった灰白透明。胎は黄みがかった灰白色。338は高麗無釉陶器盤口壺。口径13.4cm。灰褐色光沢なし。胎土明赤褐色。339・340は滑石製品。339は鍋鋳転用石錘。38×30×20mm41g。孔径15mm。340は石錘か陽物未製品。50×20×16mm。341は石玉。玄武岩剥片の周縁を敲打で円形に成形。45×46×10mm30g。342は石鍋片。口縁が内傾。鍔径40cm。厚14mm。口唇・内面を丁寧に研磨。以上12世紀中～後半。

2）**井戸**　調査区の南部で調査区に沿って並列した井戸2基を検出した。

SE35（Fig.24 Ph.48・49）調査区南東B5グリッドに位置し、SE27を切りSE18に切られる。径3.4mの円形掘方内をさらに径1.9・1.15mの3段に掘り下げ径75cm程の桶を井筒として据える。2m上面まで径は殆ど変わらず、上方1m程は径1.3m程に広がる。底面高1.05m。

出土遺物　(Fig.27 Ph.50) 345は同安窯系青磁碗。底径5.7cm。釉オリーブ色透明。胎灰黄褐色。346は白磁Ⅵ類碗。口径16器高5.5cm。灰白色透明釉。胎灰白色。輪状掻き取り。347は白磁四耳壺。口径11.8cm。釉灰オリーブ透明全面施釉。胎淡灰色。348は褐釉四耳壺。胴径38.4cm。釉暗赤褐色。内面は流れる。胎褐灰色。349は越州窯系青磁盤口壺。350は白緑天目碗。白緑以下黒褐・褐色不透明釉。胎土黄灰色。351は墨書「僧綱」白磁Ⅳ類碗。352～360は瓦玉。352は土師器鉢89×11㎜71g以上。353は白磁碗77×31・88g。354は白磁碗77×20・95g。355は土師質鍋53×10・29g。356は瓦器塊75×11・42g。357は瓦37×13・21g。358は土師器甕29×18・8g。359は瓦27×12・11g。360は瓦24×12㎜・8g。361は石鍋鍔部転用スタンプ状製品半欠。63×33㎜。362・363はガラス炉壁。内面湾曲で表面2～4㎜が暗黄灰色に熔解還元。外面は平坦。暗灰褐色。断明赤褐色。上下面は粘土接合痕。362厚33幅36㎜・363厚26幅28㎜。36～39は鉄器。36はヤス。全長99㎜ 断面6㎜の角錐。刃長45㎜12g。中茎に木質。367は刀子か。115×27×7㎜。364は断面湾曲の緑金具。80＋α×64＋α断面10×4㎜。365は方形締め金具。70×50㎜。径4～8㎜。以上12世紀中～後半。



Ph.47 SK33・34・42出土遺物

SE38（Fig.24 Ph.48・49）SE35の西4mのC5グリッドに位置し、SE20・27に切られる。径3.6mの円形堀方内をさらに径1.8mの2段に掘り下げ径50cm程の桶を井筒として据える。1.2m上面まで径は殆ど変わらず、上方1m程は径1m程に広がる。現況での底面高2.0mであと1m弱下がる。

出土遺物　（Fig.27 Ph.51）**368**は土師器丸底坏。口径15.6器高3.7cm。外面腰部に指頭圧痕・内面にヘラ当て痕。橙色。**369**は土師器**埦**。口径15.2器高5.5cm。外底糸切り。浅黄橙色。**370**はC群無釉陶器ガラス坩埚。口径7.6cm。淡褐色。被熱せず未使用。**371**は楠葉型瓦器**埦**。黒灰色。胎土灰色。**372～375**は瓦玉。**372**は白磁碗Ⅵ類66×25mm114g。**373**は土師器**埦**79×13mm59g。**374**は白磁壺高台24×18mm13g。**375**は瓦。6面磨り取り23×24mm15g。**376**は管状土錘。41×18mm12g。径5mmのコンパス文スタンプ。**377**は石鍋転用有溝石錘。64×39×25mm82g。**378**は目の粗い乱れた斜格子叩き平瓦。側面面取り。厚26mm。以上12世紀初頭～前半。

Ph.48　SE35堀方上端（西から）

Ph.49　SE35土層断面（西から）

3）**溝**　溝は調査区北東部で矩形に屈曲するSD31と調査区中央を縦断するSD32の2条を検出した。

SD32（Fig.28 Ph.52・53）調査区中央を縦断する溝でSE01・27に切られる。幅2.1m深さ80cm程で、当該区では最大規模の溝。底面には砂が堆積し（2層）、上層も砂と粘質土の細かな互層となっており（1層）水が流れた状態である。遺物は1層中に集中し、殊に土師質移動式竈1個体分の破片が出土。

出土遺物　（Fig.29 Ph.54・55）**379・380**は龍泉窯系青磁。**379**は輪花碗。口径16.4cm。釉は灰オリーブ透明。胎灰色。**380**は平底皿。釉は暗緑灰色透明。胎灰色。**381**は同安窯系青磁平底皿。口径9.4器高2.1cm。口唇に灯心痕多数。**382～384**は白磁。**382**はⅨ類碗。口径15器高5.5cm。見込み輪状掻き取り。**383**はⅣ類碗。口径15.8器高6.3cm。**384**は平底皿Ⅴ類。口径9.8器高2.3cm。**385～387**は陶器。**385**は準A茶釉四耳壺。口径12.6cm。**386**は小壺。口径2.8cm。口縁内面～外面オリーブ灰色釉。胎灰色。**387**はC群四耳壺。口径12.6cm。釉オリーブ黄色。胎灰色。**388**は鞴羽口。径10cm程。厚13mm程が被熱で還元ガラス化。**389**は土師質ガラス坩埚。平底径6.6cm。砂粒を多量、

器壁22㎜。被熱で殆どが陶質化。内面に青色ガラスが薄く遺存表面銀化。外面にガラスが薄く染みこむ。灰～明赤褐色。390・391は高麗無釉陶器。390は壺で口径12㎝。灰褐色つや無し。胎土橙色。391は甕。上半格子目タタキに同心円当て具痕・下半は平行タタキに平行当て具痕。外面灰赤色。内面暗赤褐色。392は楠葉型瓦器塊。黒色。胎土浅黄橙色。393～397は土師器。393は塊。口径16.1㎝。鈍い黄橙色。394は坏。口径15.4器高3.3㎝。外底糸切り板圧痕。395は丸底坏。14.6×3.4㎝。灰褐色。396・397は皿。外底糸切り板圧痕。橙色。396は口径9器高1.2㎝。397は9.4×1.7㎝。398は土師質移動式竈。上開口部は外方に4・5㎝屈折して鍋受けとなり径58掘部径49㎝で内径でも上方

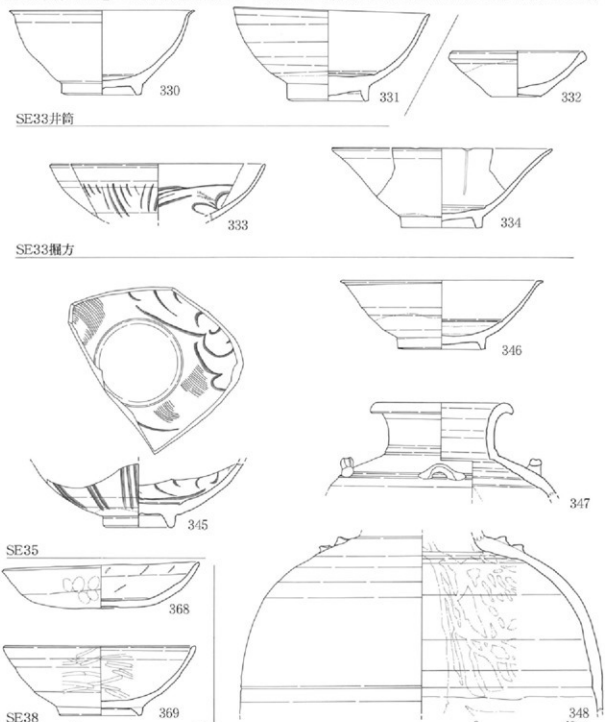
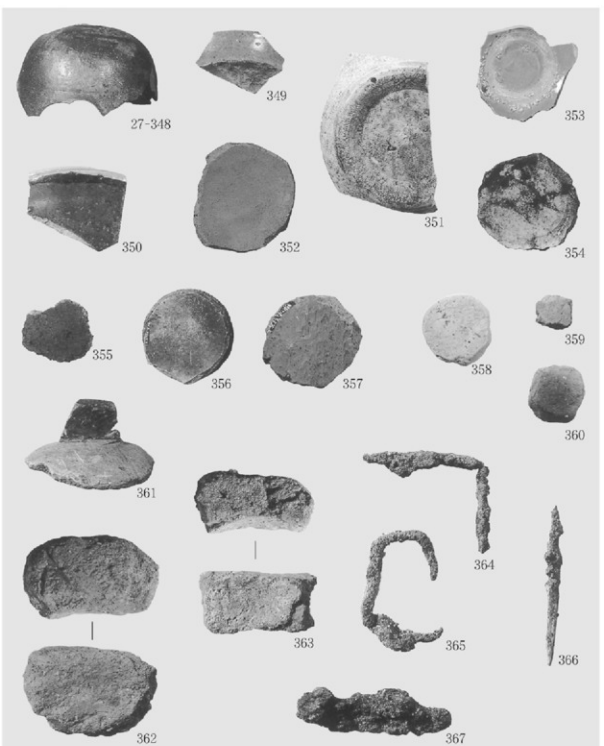
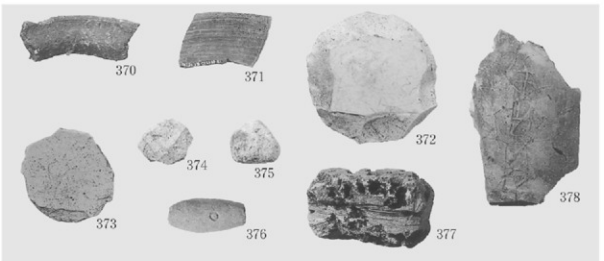


Fig.27 SE33・35・38出土遺物実測図（1/4・1/6）

が開く。器高41.7cm。このうち焚口を高さ30.5上辺40下辺54cmと大きく取り、両側の底は上辺の底を突き抜け開口部下まで延びる。側面は上面が7cm程後退して焚口上方は14cmも大きくカットされ「Z」字状となる特異な器形で胴中から下位に「T」字状に突帯を施す。399はⅠ類石鍋底部。径19cm。厚15mm。400は石鍋転用有溝石錘。68×37×8mm63g。401は石英斑岩砥石。4面を使用。鞍部幅44厚40mm。402は「太平通寶」。403は鉄器鎹残欠。以上12世紀中～後半。



Ph.50 SE35出土遺物



Ph.51 SE38出土遺物

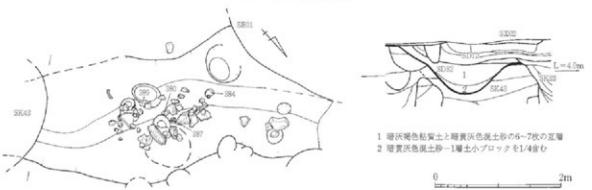


Fig.28 SD32実測図（1/60）

Ph.52 SD32（西から）

Ph.53 SD32遺物出土状況（西から）

4).**その他の出土遺物**（Fig.31 Ph.55） 404~406はSK36出土。404は**磁灶**窯黄釉盤。口径33.6器高9.9cm。405は**瓦器埦**。口径17.4器高5cm。淡灰~暗灰色。406は滑石石球。27×24mm23g。407~411はSD31出土。407・408は管状土錘。407は63×18mm18g。408は66×29・内径16mm53g。409・410は瓦玉。409は瓦26×23mm14g。410は瓦22×20mm7g。411は軽石浮子。淡灰褐色。59×41×24mm20g。磨りで成形。412はA2SP7出土白磁Ⅶ類碗。口径15器高6cm。内面に6分白堆線。

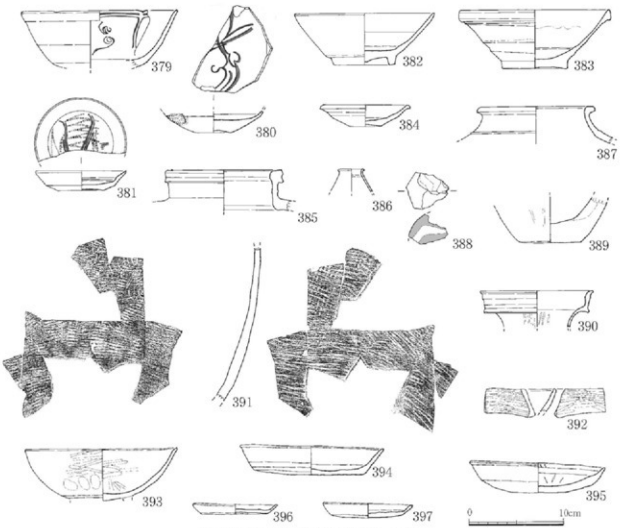
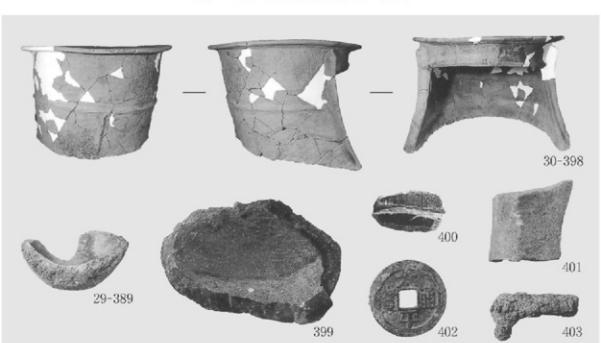


Fig.29 SD32出土遺物実測図.1 (1/4)



Ph.54 SD32出土遺物

413はC2SP10出土同安窯系平底皿。414・415はSK37出土鉄器。414は釣針。38×23mm。415は紡錘。径38厚7mm。416はSK41出土釣針。24×12mm。

2)**包含層2層出土遺物**（Fig.32 Ph.56）2～3面間掘削時の出土遺物を包含層2層とした。417は銅製巡方。28×15×6mmで、通常の半分近くの幅。内面3箇所に皮留めの支柱。418は白磁Ⅱ類碗。口径16器高6.3cm。オリーブがかった灰白透明釉。胎明灰色。419は長門系緑釉瓶か水注。底径13cm。釉はややくすんだ黄緑色。外底の大半と内面露胎。胎土精良で淡赤橙色。420は白磁小碗。口径10器高4.6cm。灰白半濁釉を厚く掛ける。421は口禿青白磁碗。外面片切連弁。422は型作り白磁無頸小壷。口径7.6cm。口唇掻き取り。423は白磁子持ち合子。青味がかった灰白釉を高台際まで施釉。底径4.8cm。425・426は楕葉型瓦器塊。黒色。胎土灰白色。427～435は瓦玉。427はトチン34×7mm10g。428は白磁碗72×20mm90g。見込みに胎土目焙着。429は白磁碗73×18mm77g。430は白磁碗75×15mm103g。431は白磁碗72×21mm99g。432は青磁平底皿82×11mm67g。433は陶器甕56×9mm25g。434は須恵器甕35×17mm18g。435は白磁碗24×15mm9g。436は瓦質甕27×9mm8g。437は土師質「布袋？」人形片。438・439は管状土錘。438は折断品を再利用。40×16mm10g。439は47×14mm11g。440は土師質送風管。外径29内径11mm。441はC群ガラス坩塝。底面に青色ガラスが1cm程遺存する。表面銀化。外底砂焙着。442は土師質ガラス熔解炉底か支脚。径11cm程で厚3cm強遺存する。上面に砂・方解石礫が熔解ガラス化して4cm程3段に積み重なっている。ひびにもガラスが染みこむ。443は土師質坩塝で口径11cm程。外面ナ

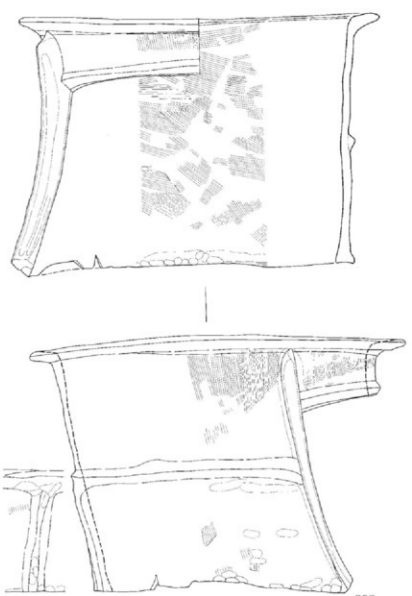


Fig.30　SD32出土遺物実測図2（1/6）

デで接合痕が残る。内面粗いヨコハケ。被熱で外面から9割が還元陶質化。**444**はⅡ類石鍋。口径20.4cm。**445**は滑石製双胴器。41×31×16mm。内面は回転使用摩滅により間仕切りは消失し器壁は薄くなる。舞錐・引き弓錐等回転軸の受け具と考える。**446**は滑石製摘み形製品。全長19径14～6mm 3g。**447**～**451**は石球。粗粒砂岩（姪浜石）製で敲打・磨りで整形。**447**は22×24mm15g。**448**は

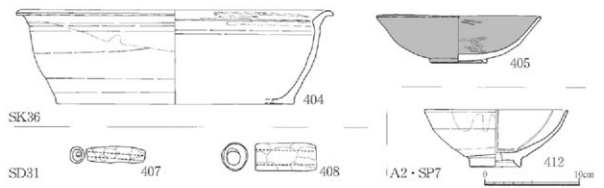
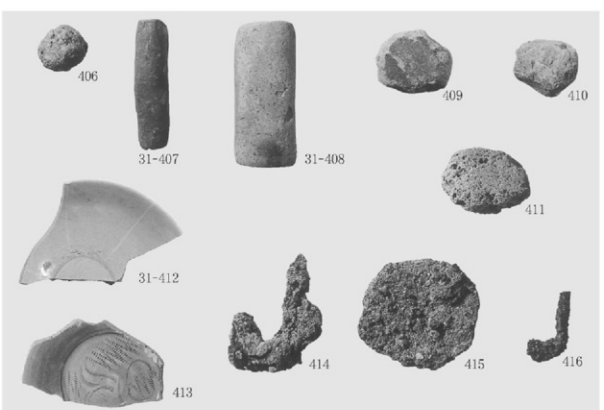


Fig.31 第3面出土遺物実測図（1/4）



Ph.55 第3面出土遺物

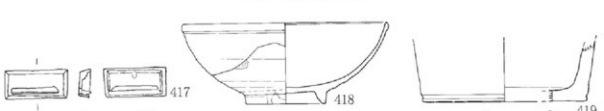
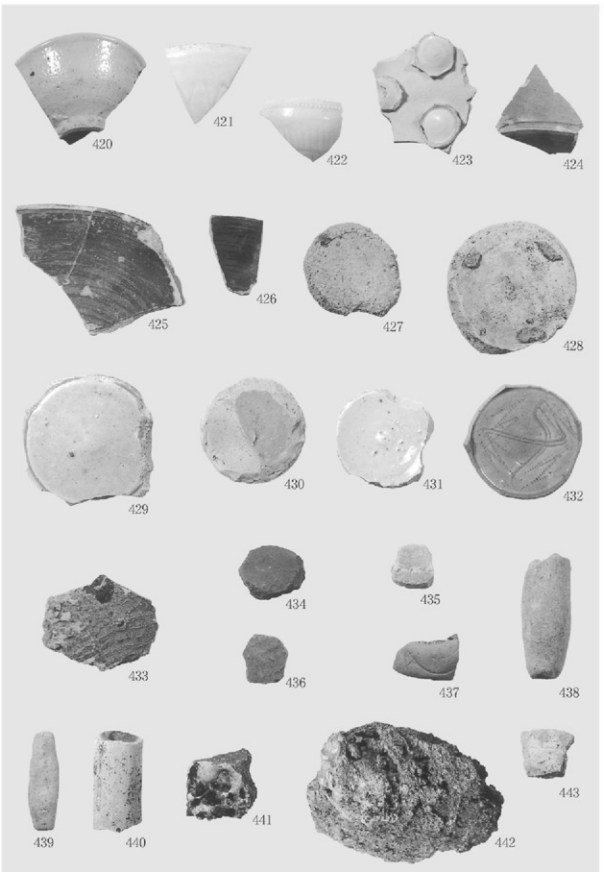
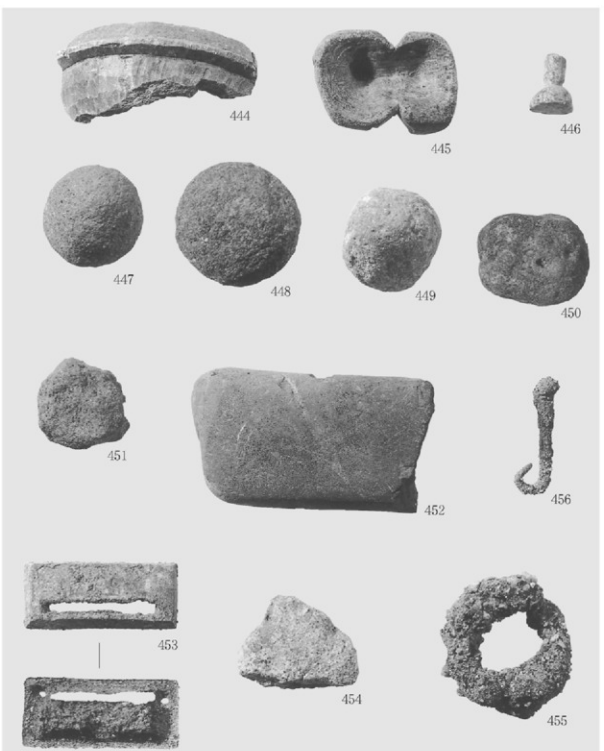


Fig.32 包含層2層出土遺物実測図（1/2・1/3）



Ph.56 包含層2層出土遺物.1

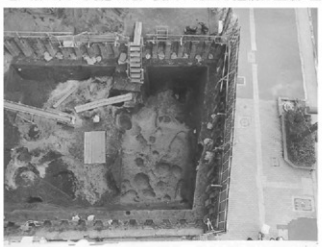
26×30㎜27g。449は25×21㎜12g。450は26×20㎜16g。451は23×20㎜11g。452は暗灰色頁岩礫を用いた手持ち砥石で幅41厚17㎜。4面を砥面とするが使用は浅い。454は灰白色砂岩様の自然礫で39×29×10㎜37gと比重が重く、鉛を含むか。455は鉄環で外径37×34内径19×14㎜。456は鉄釘の先端を径2cmに曲げた吊り金具で全長61㎜。



Ph.57　包含層2層出土遺物.2

5．第４面の調査 (Fig.33 Ph.58)

第4面の調査は第3面より風成層ｆ・茶褐色砂ｇ層を60cm程掘り下げた標高約3.4m、黄灰色中砂の地山層上面で実施した。検出した主な遺構は土壙7基・溝1条・他柱穴で、井戸堀方の間にかろうじて遺存している。時期は古墳時代前期～11世紀後半を中心とする。



Ph.58 第4面北半部全景（東から）

1).**土壙** 調査区の全面で7基の土壙を検出した。面積の2/3程を井戸掘方に切られており、全体が明らかでない遺構が多い。

SK48 調査区北西部C2グリッドに位置し、殆どをSE01堀方に切られる。120＋α×15＋α深さ15cmを測る。

出土遺物 (Fig.35) **457**は須恵器坏蓋。返りはしっかりとする。灰色。**458**は土師器坏。外面にケンマ。橙色。8世紀後半。

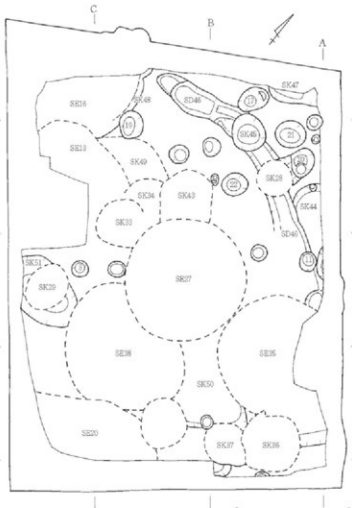


Fig.33 第4面遺構全体図（1/100）

SK50 (Fig.34) 調査区南SE35・SE38の堀方間に位置する。殆どを切られ2.2＋α×1.9＋αm深さ10cm。覆土は茶褐色砂。上面で検出された弥生終末期甕471はこれに伴う可能性がある。

出土遺物 (Ph.62) **466**は花崗岩円礫を用いた石杵で90×50×48mm 316gを測る。使用は浅く先端径13mm程が敲打琢磨で丸く平坦になる。平坦面に若干赤色顔料が染みこむ。弥生終末～古墳初頭。

SK51 (Fig.34) 調査区西部D4グリッドに位置し中央をSK29に切られる。2.0＋α×1.4＋αm深さ10cmの楕円形土壙。覆土は黒灰色砂質土で、西側隅で多くの土器が出土した。

出土遺物 (Fig.35 Ph.62) **459**は土師器坏蓋。口径24cm。橙色。**460**は須恵器坏蓋。口径15cm。灰色。**461**は須恵器坏。口径14.4器高3.2cm。灰白色。**462**は土師器甕。口径25cm。外面タテハケ・口縁内面ヨ

コハケ以下にナナメケズリ。浅黄橙～橙色。463は土師器焼塩壺。外面ナナメハケ後ナデ・内面細かな布圧痕。橙色。464は鉢形の焼塩壺。外面ナデ接合痕が残る。内面ヨコナデ。外面が被熱し暗赤褐～明赤褐色・内面鈍い黄橙色。以上8世紀後半。

2).溝　溝は調査区北部を東西方向に北に緩い弧を描いて古墳時代後期のSD46が延びる。

SD46（Fig.34）調査区北部を東西に横断する溝で北に緩い弧を描く。SK45に切られる。幅60cm

Ph.59　第4面北半部全景（西から）

Ph.60　第4面南半部全景（東から）

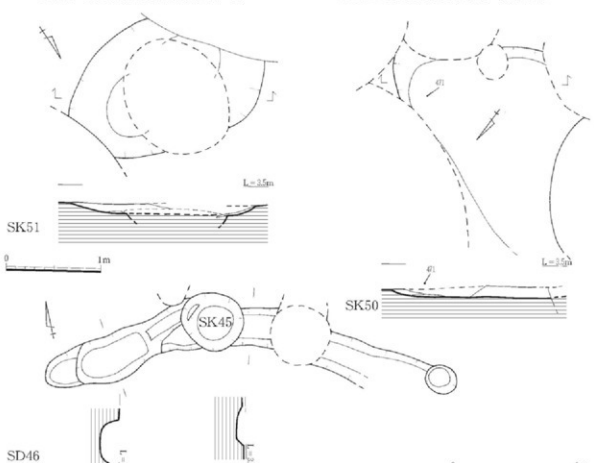


Fig.34　SK50・51（1/40）・SD46実測図（1/60）

深さ15cm程で、黒灰色砂質土が堆積する。

出土遺物　(Fig.35) 465は土師器坩で胴径5.6cm。外面細かなハケ後緩いケンマ。内面ナデ。外橙色内鈍い黄橙色。他に須恵器甕・坏小片土師器甕小片が出土する。古墳時代後期。

3).**その他の出土遺物** (Ph.62)　467はB3SP22出土の刀子状鉄器。116×29×7mm。

4).**包含層3層出土遺物** (Fig.36 Ph.62)　468は古式土師器高坏。口径14cm。坏部ヨコケンマ。脚柱タテナデ。橙色。469は庄内式系甕肩部。横位の細筋タタキ。内面ナデ。鈍い橙色。470は土師器山陰系甕口縁。外面肩部に帯状にヨコハケ。他ヨコナデ。浅黄橙色。471は弥生終末期在地系二重口縁甕。内外面ハケ。肩部複合突帯にハケ工具で十字刻みを施す。口径54cm。橙色。SK50上位で検出(Ph.61)。472は土師器甕口縁。口径17.4cm。473は須恵器Ⅱ期甕。口径23.4cm。口縁外面突帯間に波状文。暗灰色。上面に自然釉。474は古墳後期土師器。口径15.4器高15.5cm。外面上半指頭圧ヨコナデ・下半粗いタテヘラナデ。内面口縁ヨコナデ以下ヘラケズリ。

Ph.61　包含層3層土器出土状況（南から）

475は土師器移動式竈焚口庇部。高さ20上辺22下辺26cm幅7cmと小さい鈍い橙色。476は大形須恵器高台坏。口径17.8器高6.3cm。灰色。8世紀前半。477は布留式甕肩部。外面タテハケ後ヨコハケ波状文を施す。内面胴上位以下にナナメケズリ。黄橙色。478は薄い円筒埴輪透孔部破片。外面タテハケ内面ナナメハケで内外に赤色顔料塗布。胎土黄橙色。479は須恵器甕口縁。外面にヘラ記号。480は須恵器壺。胴下半平行タタキ後胴全面にカキメ。内面下半同心円当具痕。胴径24cm。481は鞴羽口。482は土師質鍋取瓶。径11cm程で内面に銅滓熔着。

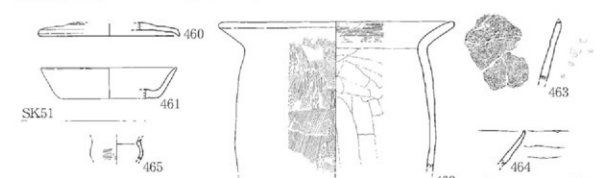


Fig.35　SK50・51・SD46SK34出土遺物実測図 (1/4)

被熱で陶質還元する。483は未使用の土師質取瓶と思われ小さな平底で底径4.3cm。器壁厚13mm。外面は粗いナデ内面は粗いケズリ・ナデ。橙色。484は銅釘。全長57mmで若干湾曲。頭部を叩き6.5×3mm7g。先細る。

6．その他の資料 (Fig.37～39)

Fig.37～39は後代の遺構に混入した資料である。489は近畿系土師器二重口縁壺。内外丹塗り。胎土橙色。490は山陰系器台。端部を面取りし屈曲部に突帯。内外ヨコナデ。褐色。491は布留式系甕。口径10.7cm。外タテハケ内口縁ナナメハケ後ヨコナデ。頸部下方以下にケズリ。鈍い黄橙色。492は須恵器坏。口径10.8器高2.6cm。暗灰色。493は須恵器擂鉢。底径9.4cm。内外ヨコナデ外底粗いヘラナデ。494は土師器甕。口径15.2cm胴下半に細かなハケ以上にナデ。肩部にハケ工具の列点。煤付着。内面頸部下ケズリ。外褐灰内灰黄褐色。495は土師器坏。口径12.0cm。外ケンマ内口縁ヨコハケ以下

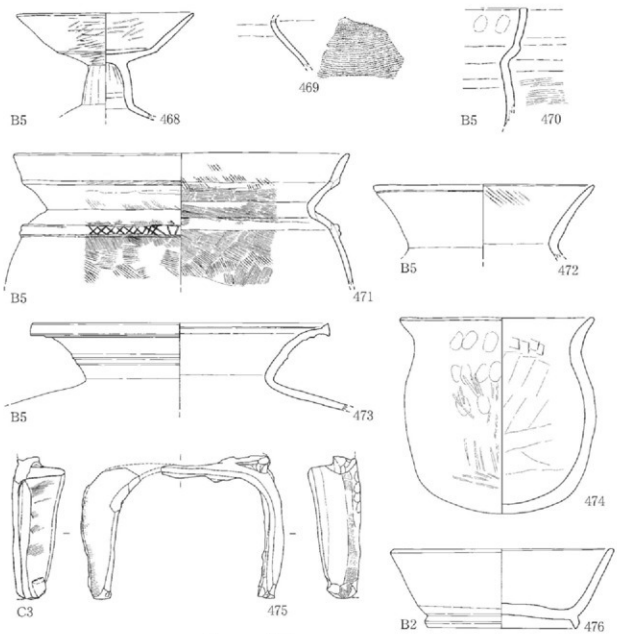


Fig.36包含層3層出土遺物実測図（1/3・1/6）

以下ナデ。橙色。496は須恵器甕。外突帯間に櫛描波状文。暗灰色。全面に自然釉。497は須恵器甕。外面にヘラ記号。498は土師器坏。口径14.3器高4.1cm。口縁ヨコナデ体部外指頭圧ヘラナデ・体部内ナデ。内外にヘラ記号。499は土師器甑。外タテハケ内ヨコ板ナデ後ナデ。外明赤褐内橙色。500～502は須恵器坏蓋。500は口径13器高2.3cm。外暗灰内灰色。501は口径14器高2.6cm。黒灰色。502は口径13.6器高2.6cm。暗灰色。503は須恵器短頸壺。暗灰色。外自然釉。504～507は都城系土師器。504は皿で口径15.8器高2.7cm。口縁ヨコナデ外底ヘラナデ。橙色。505は高台付盤。口径27.8器高3.7cm。外ヨコナデ後ヨコヘラナデ。内ヨコナデ後頸部に線文見込みに連続円弧文の暗文。橙色。

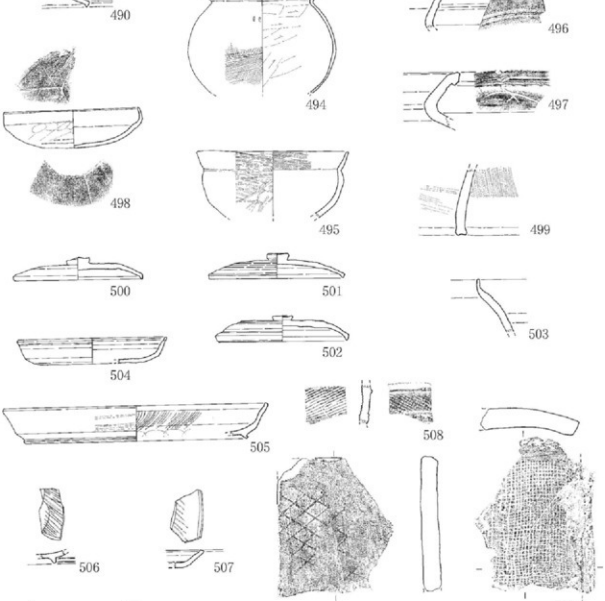


Fig.37 混入遺物実測図（1/4）

506は高台坏。外ヨコナデ後ヨコヘラナデ内ヨコナデ後横文の暗文。橙色。507は皿。口縁ヨコナデ外底ヘラケズリ後ヘラナデ。内線文の暗文。橙色。508は新羅無釉陶器甕。外細かな格子叩き内平行当具痕。暗灰色。509は斜格子叩き平瓦。側面ヘラ切り折断。厚20mm。黄橙色。510は砂岩の荒砥。4面を使用。端部は叩石に転用。幅89厚41mm。511は砂岩製石球。径34mm。512は凝灰質安山岩製紡錘車。径40厚12孔径7mm29g。513は玄武岩製柱状片刃石斧。幅32厚39mm。514は砂岩製投弾形。研磨により多面体に整形。43×18×17mm15g。515は砂岩荒砥。4面を使用。端部で90×80鞍部で62×53mm。端面は敲打で平坦に整形。516は黒色粘板岩製石包丁未製品。幅43厚4mm。

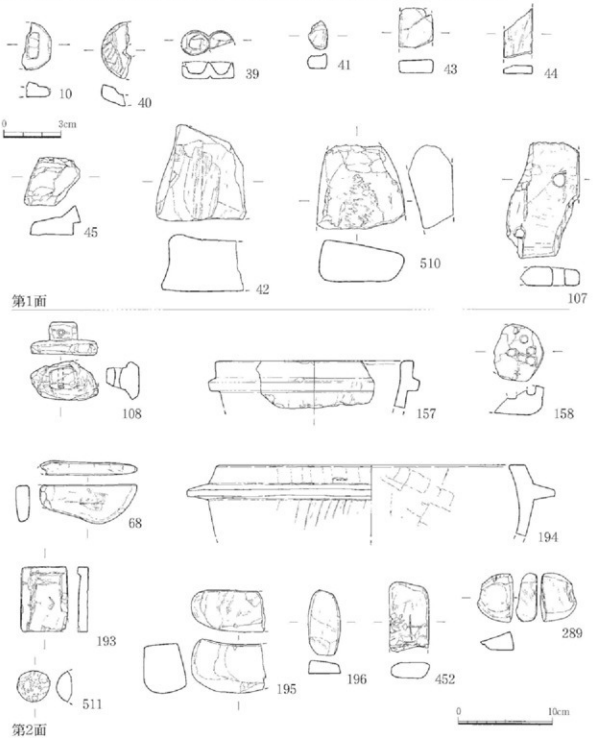


Fig.38 第1面・2面出土石器実測図（1/2・1/4）

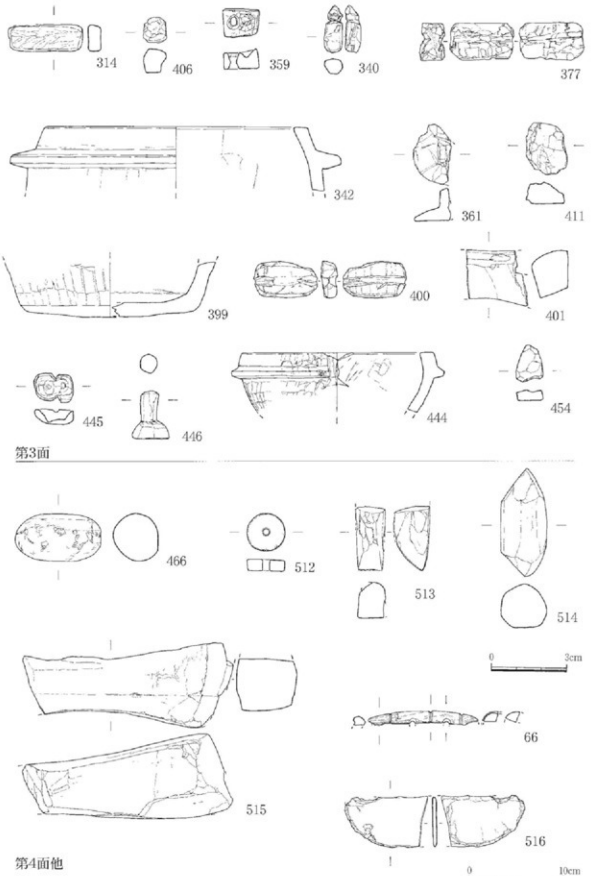
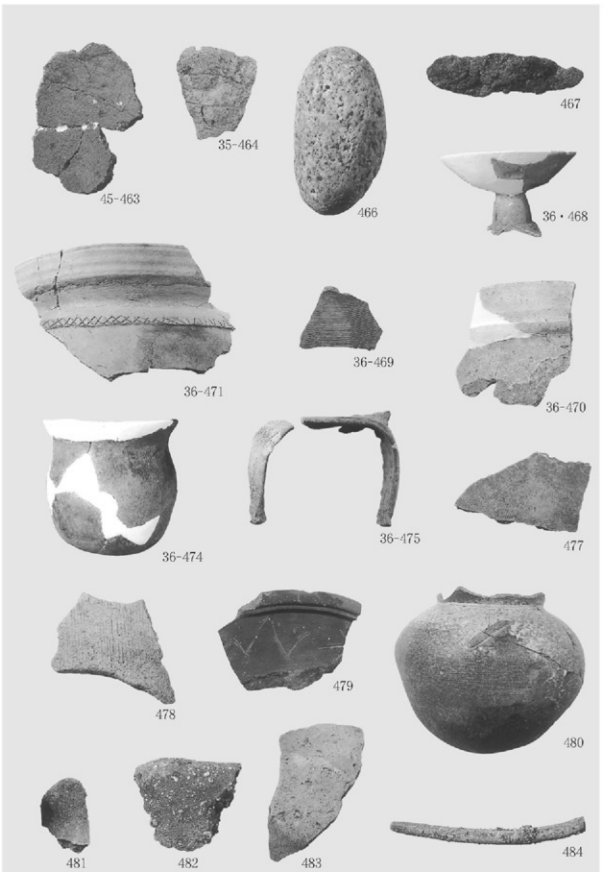


Fig.39 第3面・4面出土石器実測図 (2/3・1/4)



Ph.62　第4面出土遺物

Ⅳ．小結

今回の調査では4面にわたって古墳時代初頭の土壙3基，古墳時代後期溝1条、奈良時代土壙2基、11世紀後半土壙6基・井戸1基・溝1条、12世紀前半土壙5基、12世紀中～後半土壙14基・井戸3基・溝1条、13世紀前半土壙3基・井戸1基・溝1条、13世紀後半井戸3基・溝1条の遺構を検出した。

最下面の第4面砂層上で古墳時代初頭の土壙を3基検出したが，大部分を後代の井戸掘方に切られ、殆どが遺構の体を成さない。隣地の133次調査区では古墳時代初頭の竪穴住居が3棟検出されており、当該区もこの居住域に連なる。遺物は近畿・山陰系の外来資料が目立ち、遺跡群の交易・先進性を示している。

奈良時代は同じく最下面の第4面砂層上で土壙2基を検出したが，同じく井戸堀方に殆どを切られ全容をうかがい知れない。遺物の内容は遙方・まとまった須恵器・瓦・都城系土師器・緑釉・新羅陶器等、奈良時代が一つの盛期となり、官衙的様相が強い。133次調査区では8世紀前半の竪穴住居1棟・井戸と思われる遺構が1基検出され居住域であったことが確認されており、瓦・越州窯系青磁の出土等本調査区と変わりなく、当該地にも居住域が広がっていたものと考えられる。従来の調査結果から内陸側博多湾砂丘の東寄りの区域に居住を伴う下級官人を中心とした官衙施設が想定されており、本調査区出土の幅2cmに満たない銅製遙方もこれに該当する。

最盛期は11・12世紀代で、30基の遺構が検出され、該期で6割を占める。また、134.83㎡の面積に径5m以上の9基もの井戸がひしめいており、面積の大部分を井戸が占めている。湧水層が砂丘に平行するのか北東側の175次調査区も同様の状況である。

第1面では幅5m程の北西方向に延びる土器小片・貝殻片・粘土粒を多く含む14世紀初頭前後の硬化面を検出した。路面の可能性があり、砂丘稜線に直交する方向で、道路を挟んで北に隣接する172次調査区の土器廃棄溝とも直交関係にあり、14世紀初頭前後で時期的にも近い。遺物も吉州窯天目2点を含む天目塊・茶入・磁州鉄絵壷托・灯盞・青磁香炉と茶道関連資料が目立つ。133次調査区では白磁灯盞が検出されている。当該区では鬼瓦の一部も検出されており、172次調査区から櫛田宮にかけての一帯は鎮西探題が想定されている区域にあり、当該区も関連する可能性が高い。

14世紀初頭以降は撹乱のため遺存しない。

また、熔解ガラス・坩堝・炉壁・炉内支脚・石英・方解石礫等ガラス関係遺物が9遺構で出土し目立つ。SE38の11世紀後半を最古として、12世紀中～後半のSE27・35・SK28・SD32の4基で最盛期を示す。172次調査区が多量出土で中心地と目され、これと一連の工房が広がっている。

遺物は、銅製遙方・ガラス坩堝・ガラス玉・灯盞・吉州窯天目他、古墳時代初頭～14世紀初頭前後の土師器・須恵器・貿易陶磁器・瓦等、各遺構・包含層から90箱分検出している。この中で特異な資料は398の土師質移動式竈で、現在までに出土した竈とは器形が全く異なる。従来の竈は甕を掛けることを基本とした構造から発展し、上方をすぼめて成形されているが，これは逆に上方を広げ、径を50cm弱まで広げた特注品であり、現在までにこれに掛かるような大形の土鍋は検出されていない。広く火熱を受ける構造であり、大形の鉄鍋で、開口部内面を斜めに面取りすることから底の丸い中華鍋が最適と考える。「博多津唐房」を裏付ける最良の資料ではあるまいか。また、遊具で石球・瓦玉の出土も目立つが，メインストリートに面した35次調査区出土品と比べるといずれも小さく、瓦玉では磁器高台の比率が低く逆に瓦を用いる比率が高い。子ども社会でも地域格差があるのか。

Tab.1 遺構一覧表－1

土壙番号	面	時期	規模 縦×横×深さ（m）	主な出土遺物	写真番号	挿図番号
SK03	1面	13世紀前半	1.32×0.4＋α×0.11	青磁（龍泉Ⅱ碗）・白磁（碗・皿）天目（碗）・陶器（壺準A・B・C・盤A・）・須恵器・土師器（甕・坏）・銅銭・鉄滓		
SK04	1面	11世紀後半	1.9＋α×1.1＋α×0.24	白磁（Ⅳ碗・皿）・陶器（壺準A・B・C・甕C）・須恵器（甕・高台椀・坏・高坏）・土師器（甕・坏）・黒色土器B（椀・皿）・瓦器（椀）・瓦		
SK05	1面	12世紀前半	1.5＋α×1.2＋α+D13×0.3	白磁（Ⅳ碗・皿）・陶器（壺準A・C）・土師器（坏）・瓦器（椀）・瓦・鉄滓		
SK06	1面	12世紀中～後半	1.2×0.64×0.39	青磁（龍泉碗）・白磁（皿）・陶器（壺準A・B・盤）・須恵器（甕・瓶・坏蓋）・土師器（甕・坏・皿）・瓦・土製品（円盤）・鉄器（釘）		
SK07	1面	12世紀中～後半	0.92×0.64×0.36	白磁（Ⅳ碗・皿）・陶器（盤・甕）・須恵器（甕・蓋）・土師器（甕・坏・皿）・瓦器（椀）		
SK08	1面	12世紀前半	1.8＋α×0.68＋α×0.5	白磁（Ⅴ碗）・陶器（壺A・甕）・土師器（甕・坏・皿）・瓦		
SK09	1面	12世紀中～後半	0.92×0.85×0.22	青磁（龍泉碗・同安Ⅰ碗）・白磁（Ⅴ・Ⅵ碗・皿・壺）・陶器（壺準A・A・B・盤A・捏ね鉢C）・須恵器・土師器（甕・坏・皿）・瓦器（椀）		
SK10	2面	11世紀後半	0.95＋α×0.65＋α×0.21	白磁（碗・皿）・陶器（小瓶）・須恵器（坏）・土師器（甕・坏・椀・皿）・黒色土器A（椀）・瓦器（椀）		
SK11	2面	12世紀中～後半	1.4×0.7×0.19	青磁（龍泉Ⅰ碗・同安Ⅱ碗・皿・短頸壺）・白磁（Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿）・青白磁（碗）・陶器（壺準A・B・盤A・捏ね鉢C・甕C）・須恵器（甕・高台坏）・土師器（甕・坏・蛸壺・甑）・黒色土器A・瓦器（椀）・瓦質土器・鉄器（釘）		
SK14	2面	12世紀中～後半	1.14×0.7＋α×0.88	青磁（龍泉Ⅰ碗・皿・同安Ⅰ・Ⅱ碗・皿・鎬碗）・白磁（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ碗・Ⅱ・Ⅲ・皿・壺）・陶器（甕・壺・盤・擂鉢）・高麗無釉陶器・須恵器（甕・坏・坏蓋）・土師器（甕・坏・高坏・坩・椀・皿・焼塩壺）・黒色土器B（椀・皿）・瓦器（椀）・瓦・土製品（円盤）・石製品（石鍋）・鉄器（釘）・鉄滓・弥生土器		
SK17	2面	13世紀前半	1.5＋α×0.88＋α×0.49	青磁（龍泉Ⅰ・Ⅱ碗・同安Ⅰ碗）・白磁（Ⅳ・Ⅵ碗・皿）・天目（碗）・陶器（壺準A・B・C・盤A・捏ね鉢C）・須恵器（甕・壺・蓋・高台坏・坏）・土師器（甕・坏・坩・高坏・皿・蛸壺・灯明皿）・黒色土器A・B（坏・皿・椀）・瓦器（椀）・瓦・石製品（浮子・碁石）・鉄器（釘）・炉壁		
SK21	2面	11世紀後半	1.9×1.45＋α×0.26	白磁（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ碗）・青白磁（合子）・陶器（甕・壺・盤）・須恵器（甕・坏・高台坏）・土師器（甕・坏・皿・椀・高坏）・黒色土器A・瓦器（椀）・瓦・石製品（石鍋）・鉄滓		
SK22	2面	13世紀前半	1.55＋α×1.65×0.56	青磁（龍泉Ⅰ・Ⅱ碗・皿・同安Ⅰ・Ⅱ碗・皿・象嵌）・白磁（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ碗・皿・水注・八角）・青白磁（合子・皿）・天目（碗）・陶器（甕・盤・捏ね鉢・擂鉢）・須恵器（甕・壺・坏・高坏・高台坏）・土師器（甕・土鍋・甑・坏・皿・高台坏・椀・坩）・黒色土器A・B（椀）・瓦器（椀）・瓦質土器（甕）・瓦・土製品（円盤）・石製品（火打石）・鉄器（釘）・鉄滓・炉壁・銅滓・自然遺物（骨）・弥生土器		
SK23	2面	12世紀中～後半	2.3＋α×0.5＋α×0.3	青磁（龍泉Ⅰ碗・同安Ⅰ碗・壺）・白磁（Ⅲ・Ⅳ・白堆線碗・皿・壺・合子）・青白磁（合子）・天目（碗）・陶器（壺準A・A・B・C・盤A・甕C）・須恵器（甕・高坏・高台坏・坏・蓋）・土師器（坏・皿・甑・甕・椀・蛸壺）・黒色土器B（椀・坏・皿）・瓦器（椀）・土製品（円盤）・石製品（滑石製品・石玉）・鉄器・鉄滓・炉壁		
SK24	2面	近代	4.2＋α×1.6＋α×0.42	近代・近世陶磁器（碗・皿・壺・甕）・青花・青磁（龍泉碗・同安碗・皿）・白磁（Ⅳ・Ⅳ・Ⅸ碗・皿・壺）・青白磁・陶器（壺準A・B・盤A・緑釉盤B・擂鉢・鉢B・短頸壺B・皿C・甕C）・朝鮮陶器（瓶）・須恵器（瓶・坏身・甕・高台坏・坏・蓋）・東播系（捏ね鉢）・土師器（甕・坏・皿・椀・土鍋・壺・製塩土器）・土師質土器（鍋・火舎・博多七輪・甕）・瓦器（椀・蓋）・瓦質土器（火舎・甕）・瓦・石製品（砥石・火打石）・鉄器・鉄滓・炉壁・弥生土器（壺）		
SK25	2面	12世紀中～後半	1.6×1.2＋α×0.42	近世磁器（碗・皿）・青磁（龍泉Ⅰ碗・同安碗）・白磁（Ⅱ・Ⅳ碗）・陶器（壺準A・A・B・C）・須恵器（甕・瓶・蓋・坏）・東播系（捏ね鉢）・土師器（甕・坏・皿）・瓦器（椀）・瓦・土製品（円盤）・石製品（砥石・丸石）・鉄器（釘）・ガラス・炉壁		
SK28	2面	12世紀中～後半	1.25×1.13×0.90	青磁（越・龍泉碗・皿・同安Ⅱ碗・皿）・白磁（Ⅳ・Ⅴ碗・皿・壺）・青白磁（碗・合子）・天目（碗）・陶器（壺準A・B・四耳壺B・皿C・鉢A・盤A・捏ね鉢C・甕C）・須恵器（甕・瓶・壺・坏・蓋・高台坏）・土師器（甕・坏・皿・甑・高台皿）・瓦器（椀）・瓦・石製品（滑石製品）・鉄器（釣針・鎹）・炉壁	16・17	13
SK29	2面	11世紀末～12世紀初頭	1.8＋α×1.57×1.3	青磁（高麗碗・龍泉Ⅰ碗・皿）・白磁（Ⅴ・Ⅵ碗・皿）・青白磁（皿）・天目（碗）・陶器（甕・捏ね鉢・盤A・壺準A・緑釉）・須恵器（甕・坏・高台坏・瓶・蓋・壺・捏ね鉢）・土師器（坏・皿・甕・高台皿・鉢・椀・高坏・焼塩壺・製塩土器）・黒色土器A・B（椀・坏・皿）・瓦器（椀）・瓦質土器（甕）・瓦・土製品（円盤・土錘）・石製品（滑石・石玉）・鉄器（釘・刀子）・銅銭・鉄滓・炉壁・自然遺物（骨・歯？）	18・19	13
SK33	3面	12世紀中～後半	1.5×1.2×1.95	青磁（龍泉Ⅰ碗・皿・同安碗）・白磁（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ碗・皿・小壺・龍装飾）・青白磁（碗・合子）・陶器（甕C・鉢・壺準A・B・C・捏ね鉢C・盤C・緑釉盤C・ガラス坩堝・四耳壺A・行平A・皿B）・高麗無釉陶器・須恵器（甕・壺・坏・坏蓋・高台坏・坏身・瓶）・東播系（捏ね鉢）・土師器（甕・壺・坏・皿・椀・高坏・甑・坩・瓶・焼塩壺・玄界灘式製塩土器）・黒色土器A・B（坏・皿）・瓦器（椀・坏・皿）・瓦・瓦玉・石製品（石錘・沈子・石鍋・円盤・砥石）・鉄器（釘・刀子）・鉄滓・炉壁・ガラス	46	24
SK34	3面	12世紀中～後半	0.78×1.15×1.15	青磁（龍泉Ⅰ碗・同安Ⅱ碗・皿）・白磁（Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ碗・皿・小碗・壺）・青白磁（碗・合子）・天目（碗）・陶器（甕C・壺準A・A・B・C・盤A・短頸壺B・捏ね鉢C・ガラス坩堝C）・須恵器（甕・坏・高台坏・蓋・瓶）・土師器（坏・皿・甕・甑・高坏・焼塩壺・甑）・瓦器（椀）・瓦質土器（火舎）・瓦・土製品（円盤）・石製品（砥石・石玉・石鍋）・鉄器（釘・鎌）・鉄滓・銅滓・ガラス・自然遺物（骨）・弥生土器	43・44	24
SK36	3面	11世紀後半～12世紀後半	1.7＋α×1.6×0.62	青磁（同安Ⅰ碗）・白磁（Ⅳ・Ⅴ碗・皿）・陶器（甕・盤・壺・鉢）・須恵器（甕・壺・坏蓋・坏・坏身）・土師器（坏・皿・坏蓋・坩・甕・玄界灘式製塩土器）・黒色土器B（椀）・瓦器（椀）・瓦・土製品（円盤）・石製品（滑石・石玉）・鉄器（釣針）		
SK37	3面	12世紀前半	1.0＋α×1.08×0.71	白磁（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ碗・皿・壺）・青白磁（合子）・天目（碗）・陶器（壺準A・A・B・水注・甕C）・須恵器（甕・坏・坏身・蓋・高台坏・鉢）・土師器（甕・坏・椀・皿・高坏・蓋）・黒色土器B（椀）・瓦器（椀）・瓦・土製品（円盤）・石製品（石鍋）・鉄器（釘・釣針・紡錘車）		
SK39	3面	12世紀中～後半	1.1＋α×0.6＋α×0.93	青磁（龍泉Ⅰ碗・同安Ⅰ碗）・白磁（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ碗・壺）・陶器（壺準A・A・盤）・土師器（甕・坏・蓋）・瓦質土器（甕）・瓦・鉄器（釘）		
SK40	3面	12世紀前半	1.4×1.18×0.46	白磁（Ⅳ・Ⅴ碗・小壺）・陶器（壺準A・B）・灰釉陶器・高麗無釉陶器・須恵器（坏・壺・高台坏・蓋）・土師器（甕・椀・坏）・黒色土器B（椀）・瓦器（椀）・瓦・石製品（砥石）・鉄器（鍋？）・炉壁・自然遺物（貝）		
SK41	3面	12世紀前半	1.62×0.6×0.48	青磁（越）・白磁（Ⅴ碗）・陶器（壺B・捏ね鉢C・盤A）・須恵器（甕・高台坏・壺）・土師器（甕・高坏・坏・皿・椀・鉢・焼塩壺）・瓦器（皿）・石製品（滑石）・鉄器（釣針）		
SK42	3面	12世紀中～後半	1.45＋α×1.0＋α×1.1	青磁（龍泉Ⅰ碗・小碗・同安Ⅰ・Ⅱ碗・皿）・白磁（Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿・壺・香炉）・青白磁（碗・合子）・天目（碗）・陶器（壺準A・B・C・盤A・甕A・捏ね鉢C・甕C）・須恵器（甕・坏・坏蓋・蓋・高台坏）・土師器（甕・高坏・坏・皿・焼塩壺）・黒色土器B（椀）・瓦器（椀）・瓦質土器（甕）・瓦・瓦玉・土製品（円盤）・石製品（滑石・丸石・石塔片・砥石）・鉄器（釘）・鉄滓・炉壁・自然遺物（骨）		24
SK43	3面	12世紀中～後半	1.8＋α×1.5＋α×0.78	青磁（龍泉碗）・白磁（Ⅳ・Ⅸ碗）・陶器（甕・四耳壺A・ガラス坩堝）・須恵器（坏・蓋・甕）・土師器（甕・坏・高坏・焼塩壺）・黒色土器B（坏）・瓦・弥生土器（甕・鉢）	45	24
SK44	4面	古墳前期	2.2×0.8＋α×0.11	土師器（布留甕）		
SK45	4面	11世紀後半	1.0×0.9×0.41	白磁（Ⅳ碗）・須恵器（坏・高台坏）・土師器（甕・鉢・坏・高坏・甑）・土製品（円盤）・羽口・石製品（丸石）・自然遺物（骨）		
SK47	4面	古墳前期	1.37＋α×0.5＋α×0.28	土師器（布留甕）・鉄滓		

Tab.2 遺構一覧表－2

SK48	4面	奈良後半	1.20 ＋ α × 0.15 ＋ α × 0.15	須恵器（壺・坏蓋）・土師器（甕・坏）		
SK49	4面	11世紀後半	2.2 ＋ α × 1.2 ＋ α × 0.49	白磁（Ⅳ碗・皿）・陶器（壺・ガラス坩堝）・須恵器（甕・壺）・土師器（甕・高坏・坩・甑）・鉄器・鉄滓・弥生土器		
SK50	4面	古墳前期？	2.2 ＋ α × 1.9 ＋ α × 0.10	石製品（石杵）		34
SK51	4面	奈良後半	2.0 ＋ α × 1.4 ＋ α × 0.1	須恵器（甕・坏・坏蓋）・土師器（甕・坏・坏蓋・高坏・焼塩壺）		34
井戸番号	面	時　期	規　模 縦×横×深さ（m）	主　な　出　土　遺　物	写真番号	挿図番号
SE01	1面	13世紀後半	2.72 ＋ α × 3.0 × 1.55	青磁（龍泉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ碗・同安Ⅰ・Ⅱ碗・皿・小鉢・壺・香炉・高坏）・白磁（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿・壺・合子・香炉）・青白磁（碗・壺・皿・香炉・合子）・天目（碗）・陶器（壺・盤・緑釉・皿A群・壺B群・甕・壺・こね鉢C群・ガラス坩堝・擂鉢）・高麗無釉陶器（甕）・須恵器（壺・甕・こね鉢・高坏・高台坏・坏・坏蓋）・東播系捏ね鉢・土師器（甕・坏・皿・椀・坩・甑・高坏・焼き塩壺）土師質土器（甑・火舎・鉢）・黒色土器A・B（椀・坏・皿）・瓦器（椀）・瓦質土器（壺・甕・擂鉢・捏ね鉢・灯籠）・瓦（丸・平）・土製品（円盤・錘）・石製品（滑石製石鍋・砥石・石玉・火打石・錘）・鉄器（釘）・銅銭（皇宋通寳）・ガラス（玉）・鉄滓・炉壁・自然遺物（獣・骨）・弥生土器（壺・高坏・甕）・溶解ガラス・ob	8・9	8
SE13	2面	13世紀後半～末	3.1 × 2.5 ＋ α × 2.5	青磁（龍泉Ⅰ・Ⅱ碗・皿・同安Ⅰ・Ⅱ碗・皿・小碗）・白磁（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿・壺・小碗・合子・香炉）・青白磁（碗・皿・壺・坏托）・天目（碗）・陶器（甕・壺・盤・鉢・捏ね鉢・緑釉・ガラス坩堝）・須恵器（甕・坏・坏蓋・高台坏・鉢・小壺）・東播系捏ね鉢・土師器（甕・坏・皿・高坏・坩・高台付皿・甑・焼き塩壺）・黒色土器B・瓦器（椀・蓋）・瓦質土器（甕・鉢）・瓦・瓦玉・土製品（円盤）・石製品（滑石製品・砥石・碁石他）・鉄器（釣針・鉄釘・鍋？）・銅銭・鉄滓・炉壁・自然遺物（獣骨）・弥生土器（高坏）	23・24	16
SE16	1面	13世紀後半	2.0 × 1.4 ＋ α × 2.95	青磁（龍泉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ碗・皿・同安Ⅰ・Ⅱ碗・皿・壺・香炉）・白磁（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿・壺）・青白磁（碗・合子）・天目（碗・灯盞）・陶器（壺溜A・A・B・C・盤A・皿B・甕C・捏ね鉢C・擂鉢C・灯皿・ガラス坩堝・灯盞・黄釉合子）・須恵器（甕・坏・壺・瓶・高台坏・蓋）・東播系（捏ね鉢）・土師器（甕・鉢・坏・皿・椀・焼塩壺・甑・甑・坩）・黒色土器A・B・瓦器（椀）・瓦質土器（火舎・擂鉢・捏ね鉢・甕・鉢）・瓦・瓦玉・土製品（円盤・人形）・石製品（石鍋・石玉・石球・石塔）・鉄器（釘・楔）・銅銭・鉄滓・炉壁・自然遺物（骨・獣骨・貝）・弥生土器（甕）	26～29	16
SE18	2面	13世紀後半～14世紀初頭	4.1 ＋ α × 1.5 ＋ α × 1.5	青磁（龍泉Ⅰ・Ⅱ碗・同安Ⅰ・Ⅱ碗・皿・小鉢）・白磁（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿・壺・鉢・香炉・合子）・青白磁（碗・合子）・明青花・天目（碗）・陶器（甕C・壺溜A・A・B・C・盤A・皿B・捏ね鉢C・ガラス坩堝C・蓋A）・須恵器（甕・坏・高台坏・瓶・坏蓋・壺）・東播系（捏ね鉢）・土師器（甕・坏・皿・椀・高坏・焼塩壺・火舎・坩・坏托）・黒色土器A・B（椀・坏）・瓦器（椀）・瓦質土器（火舎・甕・捏ね鉢）・瓦・瓦玉・土製品（円盤）・石製品（石錘・石鍋・砥石・火打石・石玉）・鉄器（釣針・鏃・鍋・釘・リング）・銅銭・鉄滓・炉壁・自然遺物（骨）	12	8
SE20	1面	近世	2.25 × 1.0 ＋ α × 2.4	近世陶磁器（伊万里・唐津・京焼系）・青磁（龍泉Ⅰ・Ⅱ・同安碗・皿・小壺）・白磁（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿・壺・小碗）・青白磁（碗・皿・合子）・明青花・天目（碗）・陶器（甕D・壺溜A・A・B・盤A・小口瓶・軍持・鉢・捏ね鉢・行平・擂鉢・緑釉・ガラス坩堝・平鉢・短頸壺）・高麗無釉陶器（瓶・甕）・須恵器（甕・坏・坏蓋・高台坏・壺・瓶）・東播系（鉢）・土師器（坏・皿・甕・甑・鍋・高坏・火舎・七輪・捏ね鉢・擂鉢・灯明皿・椀）・土師質土器（鉢）黒色土器A・B（椀・皿）・瓦器（椀・皿）・瓦質土器（甕・捏ね鉢・擂鉢）・瓦・土製品（仏像）・石製品（鍋・石玉）・鉄器（釘）・銅銭・ガラス玉・鉄滓（椀形）・炉壁・自然遺物（獣）・弥生土器（甕）		
SE26	2面	16世紀～	1.3 ＋ α × 0.4 ＋ α × 0.92 ＋ α	青磁（龍泉・同安碗・皿）・白磁（Ⅳ碗・皿・小鉢・六角坏）・青白磁（小鉢・小壺）・陶器（壺溜A・A・B・C・盤A）・朝鮮陶器・須恵器（甕・瓶・坏・高台坏・蓋）・土師器（甕・坏・皿・椀）・土師質土器（鍋）・黒色土器B（坏）・瓦器（椀）・瓦質土器（甕）・瓦・石製品（丸石）・鉄器（釘）		
SE27	2面	12世紀中～後半	3.6 × 2.9 × 2.3	青磁（越碗・龍泉椀・皿・同安碗・皿）・白磁（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ・鉄絵・輪花碗・皿・壺）・青白磁（碗・合子）・天目（碗）・陶器（壺溜A・B・蓋A・捏ね鉢C・甕C・盤A・捏ね鉢C・ガラス坩堝C・長瓶B・行平A・皿C）・高麗無釉陶器（甕・瓶）・須恵器（甕・瓶・壺・高台坏・坏・蓋・皿・捏ね鉢・）・土師器（甕・高坏・蓋・坏・皿・椀・甑・鉢・焼塩壺）・土師質土器・黒色土器B（椀・坏・皿）・瓦器（椀）・瓦質土器・瓦・瓦玉・土製品（円盤）・石製品（石球未製品・石玉・石鍋・砥石・硯）・鉄器（釘）・ガラス玉・銅製品・炉壁・羽口・自然遺物（骨）	31・32	16
SE35	3面	12世紀中～後半	2.5 ＋ α × 3.4 × 2.8	青磁（龍泉Ⅰ碗・皿・同安Ⅰ・Ⅱ碗）・白磁（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿・壺・高台付皿）・青白磁（碗・皿・合子・壺）・天目（碗）・陶器（甕C・壺溜A・B・C・皿B・捏ね鉢C・盤・瓶A・ガラス坩堝C・行平・鉢A）・備前・高麗無釉陶器（甕・壺）・須恵器（甕・坏・高台坏・蓋・壺・鉢・瓶）・土師器（甕・坏・皿・蓋・椀・甑・坩・焼塩壺）・黒色土器B（椀・皿）・瓦器（椀）・瓦質土器（甕）・瓦・瓦玉・土製品（円盤）・石製品（石鍋・石玉・スタンプ・砥石・円盤・火打石）・鉄器（鉄鏃・釘）・鉄滓・炉壁・弥生土器（甕）	48・49	24
SE38	3面	12世紀初頭～前半	3.6 × 2.1 ＋ α × 1.9	白磁（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿）・陶器（壺溜A・A・行平A・捏ね鉢C・無釉盤口水注C）・高麗無釉陶器（甕・瓶）・須恵器（甕・坏・坏蓋・瓶・高台坏・高坏・鍋）・土師器（甕・椀・坏・皿・高坏・焼塩壺・甑・瓶）・土師質土器・黒色土器A・B（坏・椀・皿）・瓦器（椀）・瓦質土器（甕）・瓦・瓦玉・土製品（土錘・円盤）・石製品（砥石・石玉・石錘）・鉄器（鍋）・鉄滓・羽口・自然遺物（獣骨）・弥生土器（甕）		
溝番号	面	時　期	規　模 幅×深さ（m）	主　な　出　土　遺　物	写真番号	挿図番号
SD12	2面	13世紀前半～14世紀初頭	1.2 × 0.3	青磁（龍泉碗・皿・同安碗・皿・越壺）・白磁（Ⅳ・Ⅵ碗・皿・壺・水注）・青白磁（碗・皿・合子）・天目（碗）・陶器（甕・壺溜A・A・B・水注B・皿B・鉢・捏ね鉢・盤・瓶・ガラス坩堝）・須恵器（甕・壺・坏・高台坏・坏蓋・蓋）・土師器（甕・皿・坏・高台坏・焼塩壺）・土師質土器（鍋・甑？）・黒色土器A・B（椀）・瓦器（椀）・瓦質土器・瓦・瓦玉・石製品（石鍋）・鉄器（釘・刀子）・鉄滓・炉壁・自然遺物（骨・獣・種子）	34・35	19
SD15	2面	13世紀後半	1.52 × 0.8	青磁（龍泉Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ碗・同安碗・鉢）・白磁（Ⅳ・Ⅴ碗・皿・壺・小碗）・青白磁（壺）・天目（小碗）・陶器（甕溜A・壺A・B・C・捏ね鉢・盤・短頸壺B・緑釉・水注・四耳壺B）・高麗無釉陶器・須恵器（甕・坏・高台坏・蓋・瓶）・東播系（鉢）・土師器（坏・皿・甕・高坏・椀・甑・焼塩壺・玄界灘式製塩土器）・土師質土器（鍋・甑）・黒色土器B（椀）・瓦器（椀）・瓦質土器（捏ね鉢・擂鉢・甕）・瓦・瓦玉・土製品・石製品（砥石・石鍋）・鉄器（刀・釘・紡錘車・釣針）・銅製金具・鉄滓・自然遺物（骨）・弥生土器（甕棺・甕）	36・37	19
SD31	3面	11世紀後半	0.5 × 0.2	青磁（小壺）・白磁（Ⅳ・Ⅴ碗・壺・皿）・須恵器（甕・坏身・坏・坏蓋・蓋・高台坏・甑・椀・坩・高坏・焼塩壺）・土師器（甕）・黒色土器B（椀）・瓦器（椀）・・瓦玉・土製品（土錘）・石製品（石包丁）・鉄滓・弥生土器（壺）		
SD32	3面	12世紀中～後半	2.1 × 0.8	青磁（龍泉碗・皿・同安碗）・白磁（Ⅱ・Ⅳ・Ⅸ碗・皿・壺）・青白磁（壺・碗・皿）・天目（碗）・陶器（壺溜A・A・C・甕・ガラス坩堝・四耳壺A・B・黄釉四耳大壺溜A・盤A・鉢B・水注B・緑釉・皿B・捏ね鉢B・C・擂鉢C）・高麗無釉陶器（甕・壺）・須恵器（甕・瓶・高台坏・坏・蓋・坏身・坏蓋）・土師器（坏・甑・甕・高台坏・壺・皿・甑・椀・高坏・鉢・焼塩壺）・黒色土器B（椀）・瓦器（椀）・瓦質土器（火舎・鉢）・瓦・瓦玉・石製品（石鍋・石錘・砥石）・鉄器（刀子・釘・鏃）・銅銭・鉄滓・炉壁・羽口・自然遺物（骨）・弥生土器（甕）	52・53	28
SD46	4面	古墳後期	0.6 × 0.15	須恵器（甕・坏）・土師器（甕・坩）		34
その他	面	時　期	規　模 縦×横×深さ（m）	主　な　出　土　遺　物	写真番号	挿図番号
SX02	1面	13世紀末～14世紀初頭	2 × 13.5 × 0.05	青磁（越壺・龍泉Ⅰ・Ⅱ碗・皿・盤・同安Ⅰ・Ⅱ碗・皿）・白磁（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ碗・皿・合子・壺）・青白磁（合子・碗・皿）・天目（碗）・陶器（壺溜A・A・B・C・甕・鉢・捏ね鉢C・盤A・行平・ガラス坩堝C・皿C・緑釉皿・茶入・卵・水注・陶鈴）・高麗無釉陶器（甕）・須恵器（甕・壺・坏・皿・高台坏・蓋・瓶）・東播系・土師器（甕・坏・皿・蓋・高坏・椀・甑・甑・焼塩壺）・土師質土器（甕・火舎）・黒色土器A・B（坏・椀）・瓦器（椀・坏）・瓦質土器（甕）・瓦・瓦玉・土製品（土錘・円盤）・石製品（砥石・印石・円盤・石玉・石鍋）・鉄器（釘）・銅銭・ガラス玉・鉄滓・自然遺物（骨）・弥生土器	2～6	5・6

報告書抄録

ふりがな	はかた
書名	博多133
副書名	博多遺跡群第180次調査報告
巻次	133
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1045
編著者名	加藤良彦
発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667
発行年月日	20090331

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
博多遺跡群 第118次	福岡市博多区 祇園町343外	40132	0121	33° 35′ 35″	130° 24′ 33″	20071210 ～ 20080219	134.83	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落	古墳 古代 中世	井戸 土壙 道路	古式土師器・ 須恵器・土師器・ 緑釉陶器・ 貿易陶磁	14世紀初頭前後の道路面の検出とガラス工房関連遺物・中華鍋用移動式竈の出土。

博多133

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1045集

2009年（平成21年）3月31日

発行　福岡市教育委員会
〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　国崎美峰堂
〒812-0053 福岡市東区箱崎1丁目20－5
TEL 092-641-8822